
がんとNY

りずむK

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

がんとNY

【Nコード】

N6648E

【作者名】

りずむK

【あらすじ】

私が30歳のときの実話です。「がん」という病気が突然やってきて、私がそれ乗り越えるまで、22歳の少年がずっとそばにいてくれました。病気を乗り越えたあとは、彼とのお別れのときがやってきました。一生という長いスパンの中で、ケイと私の人生がほんの少し重なっていた時のお話。がんとNY。

ブローグ 9 / 11の記憶（前書き）

今、世の中にあふれている、「恋人ががんで死ぬ」話とか「余命1ヶ月の花嫁」などの、

ドラマとか、映画とか、本とか、私は見れません。

あらずじをきいただけで恐怖心でいっぱいになってしまつて、目をそらしてしまいます。

ニユース番組では、毎日のように「がん」とか「難病」の特集をやったりしていて、

そのときもあわててチャンネルをかえます。

私の中にある恐怖。私の中にある「がん」の記憶。

今は元気に社会生活に復帰しているのに、私の中にひそむ「がんの記憶」が

様々な「うつの症状」を引き起こす。

私はもつと元気に生きたい。もつと心も体も健康に生きたい。

せつかく生き延びることができたのだから、感謝して、大切に、元気に。

今、私の中の「がんの記憶」と向き合ってみようと思い、ここに記します。

最後まで書き続けたら、少し恐怖心が和らぐかもしれない。

私はただ、もつと元気に生きたいのです。

この先に記すことは、必ずしも「ドラマチック」ではないかもしれ

ません。

だけど、読んでくださる皆様と一緒に、「もっと元気に生きる」鍵を手に入れることが
できら、という思いで、記します。

りずむK

ブローグ 9 / 11の記憶

みんなの中の9 / 11の記憶はどんなだろうか？

私の中の9 / 11の記憶はこうだ。

ニューヨークに拠点を置いて、タップダンサーとして活動して5年半。

「そろそろ、日本に帰って、活動を開始する時期じゃないか？」と
考えながらも

ニューヨークのアパートを引き払う決意がつかずに、
ニューヨークと東京を行ったり来たりする日々をおくっていた。

その日、私は東京にいた。

ごく最近、日本でできた彼氏、ケイと飲んでいた。

次の日からワシントンとニューヨークで舞台があり、アメリカに戻る
ことになっていた。

「明日は飛行機に乗るだけ！」と思って、はめをはずして飲んでい
た。

いつになく、携帯がやたらに鳴るけれども、電話も無視して飲んで
いた。

午前1時直前、私とケイは一緒に家に向かった。

その時間になっても、携帯がまだ鳴っている。

さすがに「おかしい」と思った私は、電話に出た。

「ハロー？」 ↑アメリカかぶれ

「良かったあ。まだいた。まだ日本だよな？ りずむ、まだ日本？」

それは、仲の良い友人の一人だった。

「いるよ？何？なんか買ってきてほしいの？」と私。
たいてい、アメリカに戻る前にかかってくる電話は、「買い物のお
願い」だ。

「ちがうよ。何？まだ外？とにかく、急いで家に帰って、テレビつ
けな。急いで！」
と友人がせかす。

「何？今教えてよ」と急ぎ足に歩きながらも、友人にたずねる。

「説明できない。とにかく、はやく」
友人はその言葉を繰り返すだけで、動揺していた。

私は意味もわからず、急いで家に帰って、テレビをつけた。
目の前に広がった光景は、みんなが知っている、あの「9 / 11」
の光景だ。

ツインタワーに大きなジェット機が突っ込むシーンが繰り返し、繰
り返し、映し出されていた。

みんながそうであったように、私もまた、「映画のワンシーン」と
してしか

それをレジスターすることができなかった。

テレビの前に立って、呆然と見つめながら、ケイに「何これ？」つ
てたずねた。

ケイはただ首を横に振って、私の横に立って一緒に眺めた。

数分眺めていて、私の目から涙が溢れてきた。

ニューヨークは私の街だ。

ニューヨークでこの五年間生きてきた私にとって、それは、私の街だ。

他の外国人にとっても、他のアメリカ人にとっても、ニューヨークに住む人にとって

ニューヨークは、「自分の街」なのだ。

その「私の街」が、映画のセットのように壊される光景は言葉にすることができないショックだった。

ショックすぎて、現実が全然レジスターされない。

しばらくして、私は、ニューヨークの友人たちに一心不乱に電話をかけはじめた。

何回も何回も、何回も、何回も、かけ続けた。

通常の呼び出し音にすらたどりつけない、どこにかけてもつながらない、泣きながら、

めっちゃめっちゃに電話をしながらも、どこかに、変に冷静な私がいた。

その「変に冷静な私」は、

「もしかして、自分の実家のほうで地震があったりしたら、こんな気持ちで電話したり、

こんな気持ちで、自分の街が壊されるところを見るのかな？」と考えたりしていたのを覚えている。

私はケイが止めにくるまで、電話をかけ続けた。1時間もするとケイがそばに来て

「今日は無理だよ。テレビ見てごらん。友達にはメールは？メールだしてみた？」

と私を落ち着かせようと声をかけた。

「そつか！」と思って、友人にはメールを出した。

「WORRIED SICK. JUST LET ME KNOW IF YOU ARE OK?」みたいな。

（超心配してるから、大丈夫かどうかだけ教えて。）

なぜか電報みたいな文面。人は本当に大事な伝えたいことがあるときほど

口数が減るのかもしれない。

9、11に関しては、あとはみんなの知っているとおりだ。だけど、私の9、11はここから始まった。

アメリカ、ワシントンに電話が通じたのは、その三日後だった。

「ワシントンでは被害も少なく、色々な警戒宣言はだされているものの

日常生活を取り戻そうと努力をしている。

舞台も予定どおり開演するので、もし来られたら来てほしい。」と言われた。

私も行けるならば行きたいと思った。

だけど、飛行機が飛ばない。

飛行機が飛んでも、乗れる人間は限られている。

アメリカへの出入りが非常に困難になっていた。

私は仕方なく、東京に腰を落ち着けた。

ワシントン、ニューヨークには2週間の渡航予定だったので二週間、ぽっかり予定が開いてしまった。

予定があいた私に、母がすすめたのが「人間ドック」だった。「明日、人間ドックいくんだけど、一緒に行かない？」って。

全く興味も無かったし、体の不調も無いと信じていた私だったが、
「暇だから行く！」と、母の誘いにのったのだ。

そして、奇跡的にがんの早期発見をした。

9 '11が無かったら、私のがんは見つかっていなかった。

9 '11が無かったら、私は今、地球上にいなかった。

9 '11があつたから、私はまだ生きている。

9 '11があつてよかった、とは決して言えない。
けど

9 '11があつたから、私はまだ生きている。

あの日、テレビに映し出された、ツインタワーの映像と、私のがん
の記憶は

いつも、つながっている。複雑な想いでつながっている。

人間ドック↓再検査↓入院して腫瘍を摘出↓

1ヶ月の執行猶予（腫瘍を検査に出す）間に一度ニューヨークへ行
き、

ニューヨークのアパートを引き払い、東京に戻る

↓検査の結果「がん」と判明↓抗がん治療。

それまで、東京かニューヨークか、日本かアメリカか？で悩みなが
ら行ったりきたりしていた私だったが

9 '11をきっかけに日本に腰をすえることを覚悟したのだった。

いや、日本に帰って来ざるをえなくなったのだ。

私がNYを離れるきっかけとなった「がん」。

私が「がん」を乗り越えるのを見届けて NYへ旅立つケイ。

ケイと私。

がんとNY。

第一話 中野区 新井 セブンイレブン

私は30歳。働く30歳。

職業 タップダンサー。

食生活 セブンイレブン OR オリジン弁当、ときどき居酒屋。

私は6年間のアメリカ（ニューヨーク）での生活を終え、帰国したばかり。

帰国したてのダンサーなので、やや「ちやほやされる毎日」を過している。

日本のダンサーに向けてクラスや、ワークショップを多数行い、調子に乗っていた。

調子に乗ってる割には、一人暮らしの食生活は質素で、週に二回〜三回はコンビニなどで弁当を買っていた。

今日は セブンの日。

お弁当を探す私の目にとまった、痩せて背が高い少年。なんだかやたらに目が合う。

気のせい？って思ってた目をそらす。
また目が合う。

え〜と、知ってるなあ。

向こうも知ってる人だと思って見てるなあ。

え〜と、だめだ 思い出せない。

知ってる人なんだけどなあ。

レジでお金払うときも 後ろから視線を感じる。

「いや、たんに自意識過剰かも。」と
ちよつと心配になり、できるだけ知らん顔をした。

だけでもだ、わかんないや！

あきらめて自転車に乗ろうとしたとき、彼がセブンから走りでて来た。

「りずむ先生ですよね？僕あなたのクラス受けたことあります！1ヶ月くらい前です！」

ああ！生徒だ。と一瞬でもややもやが晴れた気分。
そして

ああ！生徒か。とちよつと（かなり）がっかりした気分。

まだ「先生」って呼ばれることになれてないし、先生って言われると

一気に老けたような気分になる。しかも、先生って言われちゃうと、、、手を出しづらい。

かれは「ケイです。」と名乗り「またクラスに行きますね。」と笑顔でその場を去った。

第二話 クラスの後は飲み会↓二人

セブンで会ったのは、ケイと私の家がとっても近かったから。クラスの後は、生徒さんとみんなで飲んで帰る。

みんなで飲んで帰るけど、最後まで一緒なのはケイと私だけ。

中野駅まで帰ってから「もうちょっと飲みます?」って言うとな、ケイは笑顔で「行きましよう。」って言う。

次の日もまたその次の日も「もうちょっと飲みます?」って言うとな、行きましよう」って言う。

一週間、二週間とたつうちに、私の心の中に二つの疑問が生まれた。

●「私、ケイにとっては先生だから、断れないんじゃないか?」っていう心配と、

●「なんで私、ケイに断られることをそんなに恐れているのか?」っていう疑問と。

思い切って疑問を口にだして言ってみる。

「先生だからって 気を使ってるなら 無理しないでね。私 先生って器でもないし、

いちおダンス教えてるけど、まあ、ダンス以外のことでは、えーっと そんなに先生でもないし、」

なんか微妙に強がってるんだけど(年上ってポジションを守ろうとしている)、しどろもどろでうまく言えない。

ケイは笑顔で 「なんで? このまま 分かれて、おつかれ〜じゃ

寂しいから 飲みいきましようよ！もっと一緒にいたい！」
と、まっすぐに言った。

ああ。やばい。

うわ。やばい。

全然やられた。

ああ。

この時点で 私は恋してることが判明。

大人になっても、全然「ウワテ」とかじゃなかった。

ケイは素直に「もっと一緒にいたい」と言えるのに、

私は何を守ろうとしていたのだろうか？

かっこ悪い。

そして、いちいち赤面する自分がすごくはずかしい。

第三話 初めてのSEXは緊張

こんなに年が離れている人を好きになったのは 中学生以来かな？
中学生のときは、すぐく年上の大学生とかの人を好きになったけど。
そのときは、勝手に好きだっただけで、今回とは様子が違う。

今は、私が年上で、私が大人で、私が先生で、私が、

- 悪いことをしてる気分と、
- 大人気なく、やたらに浮かれた気分と、
- 大人だから恥ずかしいことはできない、

という気持ちが入り混じって、行ったり来たりする。

ぶつちやけ 恋に中学生も30歳も無い。

おんなじにどきどきして。

おんなじに妄想して。

おんなじに切なくて。

最初に誘うときは、断られるのが怖くて。

その次、はじめて手をつなぐタイミングがいつなのか？心配して。
その次、はじめてのセックスで緊張して。

同じだ。

大人になっても恋は同じ。

ケイと私は「先生」って言う変な言葉に邪魔されて

はじめて泊まった日はSEXでできなかった。

ケイは緊張しすぎたし、立たなかった。

私は自分を責めたし、ケイも自分を責めた。

「私は、ケイにとって怖い存在なのか？」と私の女の部分が傷ついたし、

「俺、かつこ悪い。立たないとか最低。」とケイの男の部分は傷ついていた。

二人とも悲しくなったり落ち込んで、お互いを慰める言葉をかけたけど、

とても切ない気持ちに包まれながら、手をつないで眠れないまま朝を迎えた。

ただど中学生と違うところは「次はもう少し上手にできる」ってことを知っていること。

SEXは体の関係じゃなくて、心の関係だってことを知っている。回数を重ねれば、お互いの心をもっと知って、もっとやさしくできることも知っている。

ケイと私も、回数を重ねて上手になった。

第四話 年の差と地雷

はじめの数ヶ月は楽しいに決まってる。
話すこともいっぱいあるし。

ケイは若いからSEXも沢山する。

二人ともダンサーだから、スタジオと一緒に入って練習したりもするし、

そしてスタジオ練習さえもなぜかエロくなったりして楽しい。(笑)

だけど私は地雷を踏まないように気をつけてる。

地雷ってなにか？っていうと

「人生」とか「生き方」とか「お金」とか

「将来」とか「技術」とかの現実？

現実を見ちゃうと、22歳少年と30歳中年の女性がつきあうのは
厳しいから。

「好き」ってとこだけで、なんとか乗り切ろうとして自分をごまかす。

だけど一緒に生活していると、いろんな場面で説教くさくなる私がいる。

なにかというと「もっとしっかりしなよ」とか「まじめに仕事したら？」

とか「甘いなー」という、すごく言いたくない言葉が出てきてしまう。

お互いに地雷を踏まないように そつと「好き」という気持ちだけで盛り上げつつ、

最初の半年を乗り切った。

余談だが、ケイとつきあってしばらくして、私は新しいアパートに引っ越した。

私の高校から友人、まっちゃんとすがちゃんが引越しを手伝ってくれた。

同級生の男二人。付き合いが長いのもあるけど、話も合うし、力もあるし、仕事もできる。

ケイと比べないようにしてるけど、ちょっと比べちゃう。

引越しが終わって、飲んでいるとき、まっちゃんに

「おい、お前、あの若い変なのとつきあってるんじゃないだろうな？」と突っ込まれる。

私はあいまいに「えへへ、いいっしょ？かわいいっしょ？」って言う

まっちゃんは「お前 いい加減にしろよ。ふざけんなよ」。もっとちゃんとした男いるだろうが。バーカ」

と同級生らしい喝をいれられる。

いや わかってるんですけど、そこは、突っ込まないでください。好きだからしょうがない系？

まっちゃんと私の友情には特に影響は無いので「よし」としてなんとか先へ進む。

第五話 連続地雷と苛立ち

案の定 つきあって半年もたつと「価値観」の違い、とか「視点の違い」とかで、

地雷の「連続踏み付け」が続くようになった。

どかん。どかん。どかん。

沢山のマイナーインシデント（小さな出来事）がメジャークライシス（大きな危機）につながる。

マイナーインシデントの例

- ケイのバイトが続かない
- ケイのダンスについて、私が突っ込みすぎる
- ケイの借金が判明（さらに「友達のためにかりた」とかありがちのウソ）

↑たいていこの手 の借金は パチンコなどのギャンブルが風俗。

↑この年齢の少年にありがち。

- ケイの「俺もNY行つて、どうたらこうたら、」という発言

↑日本ではダメだけど
NY行つたらスゴイぜ！的な？ ↑いや日本でダメな人は アメリカでもダメっしょ？みたいな？

メジャークライシスの例

主に、私の中で勝手に疲れてきちゃう（説教ばかりしちゃうから）

でも客観的に見れば、それ全部、20代前半ならあたりまえなのかもしれない。

ただどすぐ横で見ると苛立つてきちゃうし、お互い言い過ぎちゃう。

かなりメジャーなクライシスを迎えたのは 私がある芝居に出演するのが決まったとき。

台本の中に「キスシーン」があっただけど、

ケイに言うとは面倒なことになりそうだったから黙っていた。

だけど、一緒に暮らしているから当然、家に台本が置いてある。ある日帰ってきたら、ケイが台本を手に待っていた。

そして「なんだよ、このキスシーンって。きいてねーよ。ふざけんなよー」と怒りをぶつける。

私はとっさに平謝りに謝った。

「ごめんね、ごめんね、ごめんね、言ったらイヤだと思ったから。でも仮本だから無くなるかもしれないし、まじでごめんね。ごめんね。」

と謝り続けて30分が経過、ケイのキゲンは直らず、ついに私の忍耐も切れた。

「つか、仕事だし。いい加減にしてよ!!」と逆切れ。

うぎっ!めんどくせー!!!

ケイは「逆の立場だったらどうだよ?」って当然の意見を押ししてくる。

だけどその瞬間、私の中のジャイアンシステム（お前のものは俺の

もの、

俺のものは俺のもの。のび太のくせに生意気だぞ」が作動して、

「逆とか無いし。だってケイはダンサーで仕事してないし、逆だったら私は絶対許さないけど、

私は私の仕事を認めてくれて尊重してくれる人じゃないと無理！」

ってつい、本音すぎる本音を言ってしまった。

この日から かなり険悪な日々が続いた。

第六話「がん」

そんな風でケイと私は、そのままだったら半年とか、がんばって一年くらいで別れていたと思う。

そのケイと私をもうしばらくツナイダのは、「がん」という病気だった。

病気とか怪我は、ほんとに突然、思ってもいないときにやってくる。しかも絶対に「なんであたしが？」っていう、やり場の無い怒りと共に。

そしてこの「病気」とか「怪我」の事件が起きると、その事件がかなりメジャーすぎて、

日ごろのマイナーな出来事からくるメジャーだと思っていた危機が、かなりどうでもよくなってしまう。

30歳になった私は、母のすすめで人間ドックを初体験した。検査結果とともに「再検査」のすすめが届いた。婦人科だ。

先生にうかがうと

「卵巣の近くに怪しい影があるので、詳しい検査（MRI）などの受診をおすすめします」
とのこと。

すぐにMRIを受診した。検査結果をききにいくと、先生は「できればご家族の方といらしてください」と言う。

私は え?と思つて

「イヤです。私のことですから、私がまずつかがって判断してから、家族に話す必要があれば話します」といった。

先生は困つた顔で話はじめた。

「卵巣の付近に腫瘍があるのが見えます。ですが、この腫瘍が良性のものか、

悪性のものか、開腹手術をして取り出して検査に出さないと判断ができません」

という。

それならば、やることは決まっている。

私は入院、手術の手続きをして、家に帰つてケイに状況を説明した。

入院手術は「盲腸」程度のものでたいしたことはない。

三日か四日、入院して、退院して抜糸して、。

取り出した腫瘍は、がんセンターに検査に出される。

検査には1ヶ月ほどかかるという。

ということは、私には1ヶ月の執行猶予が与えられたということだ。たぶんそれは悪性の腫瘍であることを、私は本能で知っていた。

1ヶ月の間、踊りたいだけストリートで踊つて、

クラスを教えて、ダッシュでNYへ行き、アパートをかたずけて引き払い、

出演する予定だった舞台を降りて、代役の人に引き継ぎをして、なんか考える時間があると泣きたくなるから、

踊って、飲みに行つて、遊んで、SEXして、踊って、仕事して、めいっばいつめこんでみた。

そして1ヶ月後、検査の結果がきた。

今度は先生も「どうしてもご家族の方と、、」と言つてきかない。それだけで十分、悪性であつたことがわかる。

卵巣がんだ。ちゃんとした名前は忘れてしまった。

卵巣はい細胞腫瘍 みたいな感じだったかな？

婦人科の先生が

「がんセンターのほうが多くの症例を扱っているから、がんセンターに行つたほうが安心だと思います」と紹介状を書いてくれた。

がんセンターの担当の先生は木田先生。

とてもやさしく、わかりやすく、私の病気について説明してくれた。要点は以下のとおり

- 悪性度の非常に高いがんです
- そのままにしておくと、2年以内に死亡する確率90パーセント以上です。
- ですが、近年このがんに直接ものすごく効果を発揮する抗がん剤が見つかつていて、この治療をしたら、治る確率99パーセントです。
- 残りの1パーセントは、抗がん治療を途中でやめてしまったか、体が抗がん剤に耐えられなかった場合です。
- がんセンターでは、治癒率（治る確率が比較的高い）方から、早急にベッドが空き次第治療を開始します。

ということ、私の場合は、次にベッドが空き次第、入院、抗がん

剤治療の開始となる。

それは、明日、かもしれないし、来週かもしれない。

いつかわからないけど、「その日は仕事が、、、」とかつべこべ言う
と、

リストの一番後ろに回されてしまうから、言われたらその日に入らないとダメ！ってことらしい。

先生は、最後に、「決めるのはあなた自身ですが、まだ若いし、
本当にこの薬の効果は実証されているので、治療をおすすめします。
」と付け加えた。

私は、ほかに言うべきこともなく、お願いします。と小さく言った。

頭の中が異常にクリアーだ。

真っ白だ。

そして異常に冷静に先生の話聞き、冷静に質問して、冷静に決断
していた。

「私しっかりしてるな」と、感心さえした。

だけど、家に帰る途中、東西線の中で、

アトからアトから、アトからアトから涙があふれてきた。

悲しいのか、怖いのか、悔しいのか、、、。

たぶんその全部だ。

ただただ涙がでてきて、しだいにそれは号泣にかわった。

となりにすわっていたおじさんが見かねて

「また、いい人が現れるよ」と言った。

私は心の中で「うるせえ」と「ありがと」を同時に言った。

第七話 ケイの気持ち

家に帰った私は、事の次第をケイに全部話した。
私の気持ちや、感情は、その時自分でもよくわからなかったので
事実だけを坦々と話した。

ケイは一言も発せず黙ってきいた。

ケイの沈黙が怖かった。

先に言われるのが怖くなって、私から切り出した。

「ケイはまだ若いし、私はこれから大変だと思うし、え〜と、別れ
よっか？」

言葉にしてみたら、抑えていた感情とともに涙があふれてきた。

強がっているのに、ケイにすがっていた。

ケイは若いけど、「うん、じゃあ、そうするよ」とは言えないに決
まっている。

その時、ケイは頭の中で、いっぺんに沢山のことを考えていたと思
う。

私を好きな気持ち。

でも、病気の私に付き合えるほど好きかどうか。

NYに行きたい！と考えていること。

はつきり言って、髪の毛が無くなった私をまだ好きって言えるか？
はつきり言って、毎日、吐き続けながら、ベッドで寝たきりになる
私とどれだけ一緒にいれるか？

NYに行くぞ！って決めていたけど、私の病気にどれだけ足をひっ

ばられるのか？

考えて当然だ。

ケイは黙って部屋を出て、小さな丸い石を持って帰ってきた。
河原に落ちてるような、小さな、黒くて丸い石。

「俺が病気で入院するとき、先輩にもらったんだ。なんでだかわかんないけど、すごい励まされた。

絶対治るよ！って。りずむにあげる。今は俺が何をしてあげられるのか、全然わからないけど、

一緒にいたいって気持ちは変わらないし、そばにいて力になりたいと思うよ」

みごとに「一般的な模範解答」だけど、

その時のケイにはそれは精一杯だったと思う。

でも私の中の身勝手な不安と悲しい気持ちは、ケイに「普遍の愛」を誓ってほしかったし、

「りずむがどんな風になっても、俺は超愛してるよ！」って言うてほしかった。

昨日までは、「やっぱり年の差もあるし、長くは続かないかなー」とか思ってたにせよ、

今日からは「ずっとそばにいるよ」って言うてほしかった。

だけど、ケイの中も、いっぱいいっぱいなのがわかってたから、私は

「ありがとう！じゃあ、これからよろしくー！その変な石はいらないけどね。」

と笑って強がって見せた。

第八話 一回目の入院

一回目の入院の時は元気だ。

まだ抗がん剤のダメージの凄さを知らない私は、

「12月にスタートってことは、2月終わるか3月には社会復帰しますね！」

と力強く先生に約束して、やる気まんまんだった。

木田先生は、「そんなに急がないでゆっくりやりましょう」とやさしく笑った。

この数日後、その先生の言葉の意味を、私は体感することになる。

すぐに点滴が取り付けられ、ガラガラと点滴の器械を

引きずりながら病院内を散策した。

最上階（七階だったかな？）にある「理容室」に行く。

「美容室」じゃなく「理容室」。

髪の毛も切ってくれるけど、主にはカツラの販売やアドバイスをしてくれる。

まだ、私の髪が抜け落ちるところが全く想像できないのだけど、

「カツラはつくっておいたほうがいいよ」と先生にアドバイスを受けたから。

脱毛にそなえて髪を短く切ってもらい、カツラを選んでいるうちに、「明るく乗り切ろう」という気持ちちがドンドンと失われる。

ああ、今日からこの「病人ばっかりのところ」に住んで、みんなと同じように、

点滴を引きずりながら、頭にバンダナを巻いて、日々痩せて行くの

か？

つていう現実が、急激にせまってくる。

気を抜くとすぐに涙が出そうになるので、友達を沢山よんだりしてみた。

「私は他の人と違う。」「私は元気で、友達と遊んだりできる」って思っていたい。

入院二日目もまだ元気なので、昼は母や妹と話して、友達がお見舞いにきて、

夜にはケイがきてくれた。

少しだけ良かったことは、ケイが私に心配をかけないように、きちんとバイトを続けるようになったことだ。

毎日ちゃんとバイトに行つて、終わったらお見舞いにきてくれる。

本当の打撃は三日目以降にやってきた。薬の副作用がはじまったのだ。

微熱が続くようになり、寝ても覚めても激しい嘔吐。

何も口にすることができなくなり、「ご飯は食べても食べなくてもいいですよ」と言われた。

完全な点滴だけの生活。

何も食べられなくなると、不思議とひたすら「料理番組」ばかりを見続けた。

そして「食べたい」という気持ちをまだ持つてる私は、「まだ大丈夫！」と自分にいいきかせた。

体が弱つてくると、心も弱つてきて、どんどんと弱気な私が顔を出した。

夜は面会時間を過ぎて、ケイを引きとめ、ケイが帰る時にはいつも泣いた。

がんセンターの先生や看護婦さんはみんなすごくやさしい。先生も看護婦さんも寝不足でオーバーワークなのが見て取れるけど、どの患者さんにもとてもやさしく、誠心誠意の治療と看護をしてくれる。

「ほかの病院と違う」

そのことが余計に私に「死」を予感させた。体も心も弱って、することも無いので、

「死ぬってどうなることかな？」と絶えず考える。

体がきつくなるにつれ、両親と兄妹、ケイ、先生と看護婦さん以外には

誰にも会いたくなくなった。

友人、知人もお見舞いにきていいのか？悪いのか？わからいから誰も来なくなった。

私の体は日に日に弱っていき、私の心はこの上なく悲観的になっていった。

第九話 なぜ死ぬのがそんなに悲しいのか？考えた

私はなぜ、病床で毎日泣くのか？
何がそんなに悲しいのか？考えた。

生きがい（仕事）、夢（仕事）、情熱（仕事）、野望（仕事）に未練があるのか？

私の場合「仕事」ダンス」。

これだけ、情熱を傾けてきたダンスに未練があるのか？

答えはNO。

死ぬとなったら、ダンスはどうでもよかった。

なぜなら、私にとってダンスは「生きている証」的な？

生きていることを表現したいし、生きていて嬉しいことを表現したいし、

生きた感動を人に伝えたいし、生きていることで出会う悲しみを人に伝えたい。

生きている限り、表現したいけど、死ぬとなったら、それはそんなに大切なことじゃなかった。

むしろ踊れなくなってもいいから、生きていたいと思う。

とにかく、元気になって、生きていれますように、って神様にひたすら祈った。

では、何がそんなに悲しいのか？

涙があふれるとき、思い浮かべるのは、家族の顔、友達の顔、先生の顔、そして

ケイの顔。つらいのは「別れ」だ。私一人、先に旅立つことが、と

てつもなくつらい。

母はいつも「心配するのは親の仕事」って言って、三十にもなった私の心配を毎日している。

元気で仕事しているときも、海外で頑張っているときも、舞台に立っているときも、

いつも、どんな時も私のことを思い、心配して、私を助けてくれる。

母はそして、自分を責める。私は好きな事を仕事にして、こんなに幸せに生きてきたのに

それでも、何かがあると、母は「私の選択が悪かったのか？」と、自分を責める。

歯の矯正をして、痛くて泣いていれば、「矯正をさせたのは間違っていたのか？」と悩み、

「聖心」という堅い学校に入って、毎日のように先生に呼び出されれば

「こんな学校に入れて、りずむの個性が失われるのでは？」と悩み、大きな怪我をすれば、「私をもっとしっかりしていれば」と母は自分を責める。

歯の矯正をしたことは、人前に出る仕事について、ものすごく感謝しているのに。

聖心という学校はとても堅かったけど、そこで学べたことや、出会った友達は「一生の宝だな。」って、思っているのに。

怪我をしても、私は何度も克服して、復活することができ、その「力」に感謝しているのに。

それでも、母は自分を責めるのだ。

そんな母が病気の私に先立たれたとき、どう思っ
て、苦しむか、予想がつく。

母は、私が想像できないくらい深く悲しみ、
そして自分を責めると思う。

父もまた、気持ちは母と同じだけど、父は父
なりの「距離」をとって、いつも私と接して
いた。

本当は毎日、顔を出したいと思っ
ているけど、1週間に2、3回「
どうだ？」って、お見舞いにくる。

あまりにもやさしい父は、私をどう見守
ったらいいか、とまどい、私には何も見
せないけど、一人のとき、悲しみ、苦し
んでいる。

まだ、親孝行を何一つしてないのに、私
は、最後の最後まで、何もできずに、

親を悲しませ、先に逝かなくてはなら
ないのか？ 考えると悔しくて、涙がと
まらない。

そして、ケイ。今、一番近くにいてく
れて、甘えさせてくれるケイ。私が逝
ってしまったら、私を忘れてしまっ
たらどうか？

時間がたてば必ず忘れて、また「新
しい彼女」ができて、手をつないで歩
いて、肩をよせあって話して、ばか話
して笑って、新しい生活を新しい人と
するよね？

その一つ一つを思い浮かべるだけで、
悲しくて、つらい。私の存在が消えて
なくなる。

残されて、生きなくてはならない人は、
しばらくの間はつらいけど、きっと忘
れる。忘れなければ、

つらくて生きて行かれないから、き
つと忘れる。

私の心だけが置いていかれる。そこでストップして、置いていかれる。

エゴイスティックな私の心は、できれば忘れないでいてほしいと思っている。

私が死んでも、私のことを思っていてほしいと思っている。

テレビで自殺のニュースが流れると、無償に腹が立って、

「その命私にくれ！！その命いららないなら私にくれ！！」と怒鳴った。

激しく嘔吐しながらも、怒鳴った。

そのくらい「命」が惜しかった。

まだ、まだ、この世の人と一緒にいたいのに。

まだまだ、会いたい人がいっぱいいるのに。

まだまだ、伝えたいことがいっぱいあるのに。

つらいのは人との別れだ。

その命、粗末にするなら、私にくれ！

何度も何度も、声に出して、願った。

第十話 失くした髪と、でっかい愛

一回目の入院で、五日間連続して薬を点滴したあと、さらに五日間様子を見て、退院した。

そのころになるよ、やっと少し、飲んだり、食べたりできるようになる。

退院して、自宅で二週間ほど、体力の回復を待ちながら、次の入院に備えるのだ。

食べられるものは、人それぞれだと言う。

私の場合は、徹底して「冷たくて」（湯気が立ってなくて）、「色が白いもの」だった。

あたたかいと、湯気のおいで、「うっ」ときちやうから、冷たいの。

そして、しょうゆでも、なんでも、香りがあるものも、やっぱり「うっ」ときちやうから

「白い」もの。NO味付け？

それは、ずばり、食パン（白いまま）とうどん（茹でてから冷まして、白いまま食べる）だった。

十日間の入院で、すでに三キロほどやせていた私はがむしやらに食べた。

家での二週間は、入院時に比べたら、すごく楽しかった。

ごろごろして、テレビ見て、ごろごろして、本読んで、ごろごろして、ケイと話して、

ごろごろして、食べて。

何よりうれしいのは、いつも誰かいてくれたこと。

寂しさがすごくまぎれる。

母、妹、父、母、妹、父、そしてケイ。

だけど、退院して、一週間目に、恐れていた日はやってきた。

お風呂に入って、髪の毛を洗っていて、髪をとかしたら、

そのまま、ずるずるって、髪の毛が抜けた。

髪、とかしたら、髪の毛の終わりまできたら、「スルっ」と指が抜けるよね？

どこまでも、ついて来たりしないよね？

髪の毛の終わりが無い。

とかすたびに、ずるずるずるずるって指にどんどん絡み付いてきて、指にからまった髪を必死で払い落とし、目を開けないで、何度も何度も払い落として

いたけれど、足元にどんどん髪の毛の束が積もっていくのが感じられた。

水が流れない。

足元にたまってゆく水を、感じながら、目をあけると、そこには、かつらができるほどの

髪の毛の山が、排水溝に詰まっていた。

恐ろしくなって、風呂場を飛び出した。

風呂場の外には洗面台。

風呂場のドアを開けた勢いで、鏡がくもっている。息を吞んで、鏡のクモリがハレルのを待った。

丸い穴。おでこの左上に、大きな丸い穴。

コースターより少し小さい、大きな丸い穴。

ごっそり、ぽっかり、抜けてしまった。

コースターはげ？

これが私？

急激に病人の顔になった私がそこにいた。

十歳老けた、私がそこにいた。

頭の左側がぽっかりとはげた、おばさんがそこにいた。

ケ
――
イ。

けええええええええええええええええいっ。

ケイ、ケイ、ケイ、ケイ、

私は力いっぱい、泣き叫びながら、ケイを呼んだ。

ケイは、大急ぎで走ってきて、洗面所のドアをあけた。

「何？どおした？大丈夫か？」

[illegible]

ひ
い
い
い
い
い
い
い
い
い
い
い
い
い
い
い
い
い
つ
く、
ぬ
っ

っ

け
っ

[illegible]

と、激しく嗚咽を繰り返し、頭を指差す。

ケイは、とりあえず、私を抱えて、洗面所を出た。

ベッドに寝かせて、やさしく、ぎゅっと抱きしめながら、

大丈夫、よしよし、大丈夫、よしよし、大丈夫、よしよし、大丈夫、よしよし、大丈夫、よしよし、

と繰り返す。

三十分ほどして、私の嗚咽はおさまったが、今度は、マシンガンのように話続けた。

「わかってたの。覚悟もできてると思ってたの。髪なんか、抜けてもまた生えるし、

そんなたいしたことじゃない！って言い聞かせてたの。だけど、思ったよりも、急激だったのと、いつぺんに、いっぱい抜けたから、すごいびつくりしちゃって、びつくり涙！みたいなの？軽くシヨツク状態みたいなの？ごめんね。

ごめんね。もう大丈夫だから。ごめんね、ごめん、ごめんね、ごめ
ん、ゝゝゝ」

ケイが今何を考えているのか、怖くて怖くて、しゃべり続けた。何かしら、言葉を発してないといられなかった。

ケイはずっと抱きしめながら、私の肩をやさしくたたきながら、よしよし、よしよし、よしよし、を繰り返していた。

その日から、一週間の間、髪の毛は抜け続け、家の中は常に「美容院の床」みたいに、毛だらけになった。

妹が、コードレスの掃除機を買ってきてくれた。

吸い取つても、吸い取つても、あとから、あとから、抜け落ちる髪。

お風呂に入って、出てくるたびに、ぽっかり空いた穴は大きくなっていた。

そして、ついに、左右の耳の横に少しずつ束があるのを残して（ま
ちやまちゃみたいな）

髪はみんな抜けてしまった。

微妙に残っている髪の毛を見て、「病人っぽいな。」って思った私は、その毛もそり落としてしまった。

そして、大きく息を吸って、大きな声でケイを呼んだ。

え〜ん。え〜ん。え〜ん。え〜ん。
え〜ん。え〜ん。え〜ん。え〜ん。

私は子供みたいに泣いた。

何の心配も無く泣いた。

心おきなく泣いた。

ケイがいてくれてよかった。

何もかも、失いかけている今、ケイがいてくれてよかった。

え〜ん え〜ん え〜ん。

数日後、父が見舞いに訪れた。

「どうだ？」

「げっ。お父さん何それ？」

父は頭を坊主にしていた。真冬のさなか、坊主にしていた。

「あれだよ、あの、その、、あれだ。」

りずむだけ、一人、坊主じゃ寂しいだろ？

お父さんも付き合っぞ！！！！」

畜生！お父さんめ！

畜生！お父さんめ！

畜生！お父さんめ！

それが、不器用な父の、愛し方だ。

やさしすぎて、不器用な父の愛し方だ。

畜生！絶対に生きてやる！！！！

お父さんにはあえて、ありがとうは言わない。

絶対に生きてやる。

第十一話 生きる方向で！

え？治療もう終わり？　って、思うかもしれないけど、私の抗がん治療は終わった。

合計三回の入退院をくりかえして

私の抗がん治療は終わった。

約二ヶ月半。予定どおりだ。

もちろん、二回目、三回目と治療はもつと苦しくなった。

体は弱り、体重は減り、高熱が何日も続き、嘔吐は更に激しく、寝返りをうつだけでも吐いたし

私はひたすら吐きながら、時が過ぎるのを待った。

だんだんと、私の細い血管には、右の腕にも、左の腕にも、点滴が入らなくなってきた。

点滴の針の場所を差し替え、差し替え、血管をたたいては、差し替えついいは、胸に穴をあけて、管を通しての点滴になった。

そんな、つらい病床だけど、私は「死ぬこと」を考えるのをやめて「生きること」を考えることにした。

なぜなら、私には、わかってしまったからだ。

頭を丸刈りにして「お父さん、つきあうぞ！」　っていう父の顔を見て、

私よりもつらい胸の痛みを、知ってしまった。

毎日、毎日、病院に通って来る、母の心の痛み。

真冬に坊主頭にした、父の心の痛み。

夜、アパートに帰り、「二人で暮らした部屋にひとりぼっちになった時

無償に涙が溢れる。」と告白したケイの心の痛み。

みんなが心を痛めている。

私は今、体がきついけど、そのぶん、体のつらさに気をとられて心は、あまり考えている余裕が無い。

そのぶん、みんなの心が痛んでいる。

父の、母の、妹の、そしてケイの。

私は、とにかく元気に、この治療を乗りきろう！と決意した。

しかも、私の場合、この治療を乗り切れば99パーセント生き延びる。

ということとは、ほとんど、生きる確立99パーセント。

ほかの健康な人になりたいしてかわらない確率だと思った。

乗り切れば、生き延びる。

乗り切れば、生き延びる。

乗り切れば、生き延びる。

って、三回繰り返ししたら、治療は終わるのだ。

あれだけつらかった治療も、数年が経過して、今になって振り返った

「一瞬のできごと」のように見える。

現に、私が社会復帰したとき、私にとっては、ものすごく長く感じられた治療期間だったけど

世の中のほとんどの人が

「え？もう終わったの？」とか

「え？早いね、そんな早いんだ。」
みたいな台詞で私を迎えた。

普通に生きていたら、あつという間の3ヶ月。

外側から見てみれば「え？もう？」とかいう時間の長さだ。

早く、外に出ないと！

早く、社会復帰しないと！

忘れられちゃう。

世の中から置いていかれちゃう。

私だけ、置いていかれちゃう。

おいていかないで。

おいていかないで。

おいていかないで。

私だけ、病床で時間が止まってる、感じがするけど、
みんなはどんどん動いてる。

だから、早く元気にならないと、おいていかれちゃう。

おいていかないで。

こうして、私は「がん」という病気を乗り越えたので
次に「生きる」ことがまっていた。

第十二話 即効、壁にアタル

生きることにも目を向け始めると、どんどん欲が出てきた。早く仕事をしたいし、早く社会に復帰したいし、早く「みんな」に追いつきたかった。

「みんな」っていうのは元気な人のこと。

だけど、即効で壁にぶち当たった。まず

●中野駅まで歩けない。

自宅から中野駅までは、通常徒歩7～8分の距離。

その距離を20～30分かけて、ゆっくりと歩いてみる。

息があがり、足ががくがくだ。

これまで、数ヶ月間、家の中で「ベッドからトイレ」が最長の運動距離だったから。

そして

●体が脂肪だらけだ

筋肉が落ちて、ぶよぶよになった体は、「自分のもの」と認めるのもいやなくらい

別人の体系だった。（↑プラス点滴生活で全身と顔がパンパンにむくんでいる）

その上

●更年期障害

卵巣を片方とってしまったので、生理が来なくなっていた。先生から言われていたが、「一時的に生理がとまって、更年期障害と同じような症状が出るのが予想されますが、

あわてずに、ゆっくり直ししよう。」とか。

先生の予感は見事に的中して、更年期障害の症状が次々に出た。真冬だというのに、突然、大粒の汗をぽたぽた、ぽたぽたたらしはじめたかと思うと、

次には、ぶるぶる震えだす症状をくりかえした。

さらに

● かつらがかぶれない

せつかくかつらをつくってもらったのだが、私はわずかに残っていた毛も剃ってしまったために、

かつらがかぶれなくなっていた。

「かつら」は通常「髪の毛に装着する」ようにできていたから。笑。

しかたなく 両面テープで貼り付ける手段をとったけど、→の更年期障害のせいで、

頭からとめどなく汗をかいたりするので、うまくない。

この時ばかりは、自分の思い切りの良さを後悔した。（↑わずかに残った髪を剃ってしまう行為）

などなど、などなど。

1月の末に治療を終えた私は

「二月から仕事するね！」と息巻いていたが、ダンスどころか、まず日常生活だ。

そのときになって、はじめて先生の言っていた

「そんなに慌てずに、ゆっくり治しましょう」の意味がわかってきた。

ゆっくりする気など、さらさらなかった私は、

- ジム通い
- エステ通い
- スタジオで一人練習と

● 「平和の森」（自らプロデュースするチーム）のリハーサルをいっぺんにはじめた。

わかった！二月に社会復帰は無理！って、ことはわかったけど、じゃあ三月でお願いします！という勢いだ。

私は、3月末のワークショップを復帰活動の第一歩にしようと思った。

すでに大量の水を飲み込んで、歩く気力など全くなかったが、流されるままにみんなと同じ方向へ。

それでも、足がふらふらで、水がどんどん口に入ってくるので、プールに浮かぶソーセージ（プールを仕切る、ソーセージみたいな浮き？）

に必死にしがみついて、流されないように頑張った。

先生は容赦なく

「りずむさん、わかめみたいになってないで、歩いて!」
とか言っているが、無理である。

先生が鬼のように見えた。

こうして、わたしは「わかめ」になりながら、30分を乗り切った。さらには、みんなが、さつさとプールからあがっていく中、一人、プールの水中と陸上の境目で、立ち上がることができず、母と70歳くらいのおばあさんに両脇をかかえられてやっとの思いでプールからあがったのだ。

ああ、情けない。

と思いながらも、毎日、生きることに向かって何かをするのは楽しかった。

そうこうするうちに、復帰の一步目と決めた、ワークショップの日がやってきた。

二日間連続のワークショップ。

一日目のクラス。

25名くらいの生徒。

久々の「仕事」は楽しくて、うきうきして、あっという間に時間は過ぎたけど、

みんなに見られていることと、鏡に囲まれていることで、「カツラ」の存在がものすごく気になって、集中力がまいちだ。

そして、クラスが終わってから、着替える時には服を脱ぐ時に「カツラ」がとれることを心配してこそそとトイレで一人着替えた。

二日目のクラスも同様に楽しかったが、やはり「カツラ」の重圧があり

胸に何かつかえているような感じで終わった。

二日目のクラスのアト、生徒さんとみんなで飲みに行った。

みんなが、私の復帰を祝ってくれるという。

とりとめのない話をしながら、楽しく飲んでいたが、その途中で私は切れた。

「すみません！私これ、ちょっと気になって、集中できないので、とっていいですか？」

と言って、カツラをとって、坊主の頭をみんなに見せ、とったカツラを右手で振り回した。

みんなは、シヨックを隠しきれない顔で、呆然と見つめた。

笑っているのか？泣いているのか？どんな言葉をかけたらいいのか？

仲の良い友達が、言った。

「私はいいいけど、生徒さんとか、りずむに憧れる人は、ちょっとシヨックかもね？」

でも、りずむが落ち着く形が一番いいんじゃない？」

うん、そうだね。私は坊主頭で「カツラ」を気にしないで、コソコソしないほうが落ち着く。

みんなは、見慣れてくれるだろう。

ワークショップも復帰の第一歩だけど、精神的には「カツラ」をとってみんなの前に出られたことが、すごく大きかった。

第十四話 マイナーインシデント リターンズ！

私が日常生活と、氣力を取り戻していくと

ケイと私の間の「むやみに愛が溢れる毎日」も姿を消し
ささいなこと（マイナーインシデント）での喧嘩が戻ってきた。

内容は、前と全く同じだ。

「がん」という事件の陰に、かくれて見えなくなっていただけで
問題は全然解決されていないからだ。

ケイは相変わらず、金も力も実力も無い。

加えて、気合もいまいちだ。↑私たちの世代に比べちゃうと

「今の若いものは、、、」と言いたくなる、気合の無さ。

ケイも、前にも後ろにも行かない、自分に苛立ちを感じているし、
「ああ、俺もニューヨークとかいきてえなあ」とやたら頻繁に口にするようになる。

私も、「うん、さっさといきなよ。」と繰り返した。

どこにいてもいいけど、「ここは俺の（私の）居場所じゃない」的な態度は

見ていて本当につまらないし、興ざめする。

今は選べる時代なのだから、日本に不満があり

日本が楽しくないなら、さっさと出て行けばいいのだ。

ケイは遅かれ早かれ出て行く。

私はこれから日本で活動を開始しようと、色々思い描いている。

ケイがNYに行くことを決め、日程が決定すると、

喧嘩の内容は「別れる、別れない」にシフトした。

ケイの言い分「ニューヨークには行くけど別れたくない！」

私の言い分「ばかじゃん。別れるに決まってる」

ケイは、わかっていないのだ。

ニューヨークに行くことがどういうことか。

日本での生活や仕事を一生懸命やっている人ならば

NYに行っても、勿論、帰ってくるけども、

日本での生活に不満ばかりあり「早くこの日常から逃げ出したい」と考えている人間がNYに行ったらどうなるか。

帰ってこない。

そうでなくても、ダンサー志望の若者がNYに行ったら、なかなか帰ってこない。

私は、6年間NYで生き、自分の居場所も見つけ、帰ってきたばかり。

これから、6年前の私と同じことをしようとしているケイと同じ温度でNYを感じ、同じ視点で見ることはできないのだ。

ケイはNYに行くとは決まっているので、

別れの日は一日、一日と近づいてきた。

最後の夜、ケイは私に手紙をくれた。

今まで、どれだけ楽しかったか、どれだけ幸せだったか。

私にとっても「別れ」はつらくないわけではない。

とても寂しい気持ちで、涙も流したけれども
「生きているから、人にはやるべきことがあり、行くべき所がある」
とわりきっていた。

その夜、眠りについた後、私は目を覚ました。

ケイが号泣している。

えゝん えゝん えゝん
えゝん えゝん えゝん
えゝん えゝん えゝん

ケイの涙をはじめて見た。

ケイの泣き声をはじめて聞いた。
びっくりして声をかけた。

「ケイ？」

ケイは私に抱きついて泣いた。

えゝん えゝん えゝん
えゝん えゝん えゝん

ずっと、ずっと、我慢してきた涙だ。

ずっと、ずっと、私を守ってきてくれた涙。

ずっと、ずっと、大人の役をやっていたケイが
はじめて、子供として流す涙だ。

私は がんばってね、ありがとうね、
がんばってね、ありがとうね。

がんばってね、ありがとうね。
をくりかえした。

ケイ、しっかりね。

NYでしっかり頑張っ
てね。

そしてありがとう。

そばにいてくれてありがとう。

ありがとうケイ。

ありがとうケイ。

ありがとうケイ。

第十五話 ケイのメール

9、11のあの日から、もう7年。

NYのケイと東京の私は今、MIXIでつながっている。

頻繁に連絡を取り合うわけじゃないけれど、時折、お互いの日記を見ては

「ああ、元気にやってるね」と確認しあう。

私はそのたびに私は、「ほらね、まだNYにいる」と心の中で、くすくす笑っている。

昨年、私は結婚した。

その日記を見て、ケイが久々にメールをくれた。

ケイのメール

ほんと、今でも俺がNY行く日に、りずむが、あのマンションのベランダから弱々しく手を振って送ってくれた姿を明確に覚えてるよ。

当時はほんと「なんでこんなに弱っている人を残して、海外なんかにこれるんだろう？」

と、そんな自分を恐ろしく思った時期もあったけど、最終的に元気になって 良かったです！！

俺もあの時（まあ今でも）子供だったし、りずむが病気になってどうしていいのかわからなかったし

もつとできることあったなーと今では 思うよ。

俺の親父は癌で死んでしまったし、ほんと生きてること、生かされてることに毎日感謝して生きてるよ。

お互い健康には気をつけて楽しくいきましょー。
では今日も良い一日を！

そんなことないよ、ケイ。

ケイは私を置いて行ったんじゃないよ、
私が元気になるのを待って、行ったんだよ。

そして、そうだね、生きていけば、今でもこうやって、メールしたり
お互いの活動を応援したり、お互いの幸せを願ったりできる。

生きていて良かったね。

生きていて良かったね。

私もケイがそばにいてくれたことは忘れないよ。

そして、生き延びることができたこの命

誰よりも大切にして生きていくよ。

誰よりも、大切にして生きていくよ。

ありがとうケイ。

最終話 今の私とウツ

今の私は、どうかというと、平凡な毎日を、一日一日乗り越えている。

「乗り越える」という言葉をなぜ使うか？という理由は、平凡に見える毎日に、「がん」の影響が残っているから。

あれから、7年、最初の一年はがんセンターに定期健診に行っていた。

そのあと、5年間も人間ドックや、婦人科の定期健診を受けた。

私は、まぎれもなく「健康」だ。

それなのに、次々と、腰や、首、足、背中、に痛みが襲ってきた。

そのあとには、呼吸が苦しくなって、「息が吸えない」と言ってパニックになり、何度も病院に行った。

さらに、ガン系痙攣。（↑石原、東京都知事と同じ症状）。目が絶えず痙攣する。

目を閉じても絶えず痙攣する。見た目よりずっとつらい。

などなど、 などなど、 次々に様々な症状が襲ってきて、私を不安にさせる。

私が行きついたところは「心療内科」だ。

体が健康になった私は「心が病氣」になっていた。それが「がん」のつめあと。

先生にうかがうと、大きい病気をした経験のある人は、知らず知らずのうちに

「また、なるのでは？」とか、「今度は違う病気になるのでは？」

「またあの治療をやるのか?」「また あの苦しみを、」
という不安が心の中に巣をつくっていてそれが、色々な症状を引き起こしたり

ウツになったりする傾向がある、とのこと。

私の場合はまだ「ウツ病」ではないが、「ウツの症状」が色々出ている。

私は抗ウツ剤と、心療内科の受診を定期的に行い、またそれ以上に「自分と向き合う」ことで、毎日を乗り切っている。

この小説の執筆も、紛れも無く、その治療のひとつだ。

はじめに書いたように、テレビや雑誌、映画などメディアでは、毎日のように「がんで死ぬ話」がやっていて

私は必死でそれらから、目をそらして生きてきた。

でも、この小説を書き始めてから、チャンネルをかえるのをやめた。私が、今、何を書こうとしているのか、何がそんなに不安で怖いか、見なければ書けないからだ。

最後まで書いてみて、私は何を伝えたかったのだろうか?

昨今、私の周囲の人は皆、多かれ、少なかれ「ウツ」の要素と症状を持っていると思う。

そんな、私たちを、そんな世の中を、そんな自分を、

どうしたら、勇気づけられるか?

どうしたら、元気づけられるか?

どうしたら、力を与えられるのか?

私は絶えず考えている。

毎日、会社に行ったり、バイトしたり、勉強したり、遊んだり、友達つくったり、恋人つくったり、友達無くしたり、恋人無くしたり、
そうやって生きていることは、本当に大変なことだ。

こんなにもギスギスした世の中で、キリキリした人の心の中で、
つらいことが沢山ある世の中で、毎日、毎日生きていくことは大変
だけど

それをがんばっているみんなは、すごいと思う。

そのことが伝えなかった。

生きている限り、生きることに関わりが無いから、つらいね。

って、言っただけ。

だけど

生きていけば、また会えるし、生きていけば、「いつかきつと、」
があるから

生きることだけは、あきらめないで。

って、伝えたい。

沢山のことが、重くのしかかりすぎてつらい時は、そんなに無理し
なくてもいいから
生きていることだけは、やめないでほしい。

と伝えなかった。

自分の命を奪わないでほしい。

人の命も奪わないでほしい。

と伝えたかった。

それだけでいい。

それだけで充分だから、そんなにがんばらなくていいから、ゝゝゝ。

命を奪わないでほしい。

「あなたが生きている」というだけで、私はそのことに、いつもエールをおくっているから。

最終話 今の私とウツ（後書き）

あとがき

私はまだ、父に「ありがとう」を言っていない。

私につきあって、坊主頭にした父。

あれほどの愛情をかけてくれた父が、

私を「はい、そうですか」と、すんなり嫁に出すわけではない。

今年（2008年）に結婚式をしたが、出席してもらえなかった。

だけど、そんなことはたいした問題じゃないと思っている。

父は私の父だ。

私は、父の娘だ。

生きている限り。

私は絶対に父より長く生きる。

生きているかぎり、私の中には「親孝行をしたい」という壮大な夢がある。

だけど、私は、父の言うことはきかない。

なぜならば、私は父にそっくりだからだ。

父もまた、おじいちゃんの言うことなど聞かずに、

「自分の道」を見つけたに違いない。

私の中には「親孝行」という壮大な夢が、

生きている限りあるだろう。

達成できるのか？

達成できないのか？

ぎりぎりセーフか？

私のゆつくりとした歩みでは間に合わないかもしれないが、
「親孝行」という壮大な夢がある。

エピソード1 NYへ行くことになったワケ

1996年3月、大学を5年かけて卒業した私は、単身NYへ向かった。

大学に5年もかけて行った理由は「ダンスにウツツをぬかした」からで、勉強熱心だったからではない。

だが、NYへ行く決意をしたきっかけは、「NYでのダンサー生活を夢見て」ではなく、

「男」だ。

とても不思議だけど、人間を動かすきっかけは、いつも、ほんのささいな出会いとか、

ほんの小さな事故だったりする。

私は大学卒業をひかえた、前年12月、タヒチ旅行に行った。

そこで、アルゼンティノの男性（アルゼンチンの血、国籍アメリカ、ボストン在住）と

激しくも、どうでもいい恋をした。笑。

彼の名前はディエゴ。

それまでは、「外人とか無理！」とか思っていた私だが、なぜか突然、ものすごい盛り上がった恋をした。完全に「タヒチマジック」だ。

私の語学力からして、ほとんど、会話は成り立っていなかったはずだが、手をつないで歩いたり

英語やスペイン語の単語を習ったり（例、「手はスペイン語で「マ

「ノっていうんだよ」

とかいう、しょうもない会話でも楽しかった。

馬鹿である。

お互いの連絡先を交換して、日本に帰ったあとも、毎日のように手紙のやりとりが続き

私は猛烈に英語を勉強しはじめた。

中学から大学まで10年間、学校でさんざん英語をやったはずだが、このときが一番勉強したと思う。

「恋」はいつも、モチベーションのトップリストだ。

というわけで、私は、あつという間に

「3月に大学を卒業したら、アメリカに渡ってダンスを勉強する」と決意していた。

「アメリカに渡って、ダンスを勉強する」の意味がよくわかんないけど

とりあえず言い訳として、もっともらしかった。

私は、なんでも自分で決めて、自分でやりたいタイプだ。

NYのことも、自分で情報収集して、日本人が経営している安全そうなところでアパートを1ヶ月予約してとりあえず、いそいそとNYへ出かけた。

NYで住むことになるならば、「学生ビザ」を取得しなければなら
ない。

ということとは、「通う学校」を決めなくてはならないのだ。

ダンススクールなのか？
英語スクールなのか？
何スクールに行くのか？

それさえ、定まっていない。

漠然とNYへ行くことを決めただけで、23歳の私はNYで何がしたいのかわかっていなかったからだ。

1ヶ月間、色々見てまわったが、当然、1ヶ月で、自分のやりたいことなど見つかるわけもない。

私はなんとなく「よさげ」な、Fordham大学（法律関係でそれなりに有名な大学。マンハッタンのほぼ真ん中、リンカーンセンターのすぐとなりにある大学）の、ESL（外国人のための英語コース）を取ることに決め
ビザ取得のために一旦帰国した。

さて、ディエゴはどうしたのか？というと、ディエゴとの激しくも、馬鹿馬鹿しい恋は、

NYで再会した瞬間にあっさり終わった。笑。

私がNYに来た！という知らせをきくと、ディエゴはボストンから週末を利用して会いにきたが

当然のことながら、会話も続かないし、話すこともないし、接点が無い。

お互い、「どしたの？元氣ないね。前と違うない？」という言葉を繰り返すばかりで、

一日、NYの町を一緒に歩いて、気まずいお茶をしたりして、夕方には、「BYE」と「You take care.」という言葉と共に
義理のほっぺに「ちゅう」で、冷たく別れて終わった。

(No real kisses , no real hugs)

↑ほんとのキスもほんとのハグも無し。

ま、そんなものだ。笑。

だけど、デイエゴとの出会いは、私をアメリカに導くには充分なきっかけだった。

「ダンサーになりたい」という気持ちは強く持っていたが、どうやって？がわからなかった私。

「アメリカに行って勉強したほうがいいと思うけど、怖い」とか、「日本で仕事ができるなら、アメリカなんていう未知の世界に行かなくてもいいでしょ？」とか

小さくまとまろう、小さくまとまろうとしていた私。

そんな私に、あっさりと、「日本を飛び出そう！」と、ハードルを越えさせてくれたのだ。

恋愛パワー、全然ばかにできない。

こうして、私は、目的も、行き先も、やりたいことさえ見えないまま、NYでの生活をスタートすることになった。

エピソード2 騙された！悲惨なアパート！

ワンポイントイングリッシュ

● ファニッシュ furnished 家具付

● plunger (プランジャー) 〓トイレが詰まったとき、が
ぼがぼやる道具。吸引式、下水掃除棒。

NYのアパートは、自力で探した、日本人経営のファニッシュ(家具付)賃貸。

人からの知識をもとに、比較的安全な地域の物件に決めた。
79STアッパーウエストサイド。

私は最初の一目で「日本人経営を信じるな！」という教訓を胸に
刻み込んだ。

なぜなら、そのアパートは、「無知な日本人を食い物にする、超ぼ
ろぼろで悲惨なアパート」だったからだ。

普通なら当然、物件を見てから決めるのだが、日本から来る場合は、
ホテルのように先に予約して

予約金も払い込みなので、行ってみたらひどくても、キャンセルで
きない仕組み。

1ヶ月10万円というそれなりの値段をとっているが、その場所は
ほぼ「倉庫」だった。

まず

●半地下

窓は1個あるけれど、半地下（ほぼ1階）なので、窓には鉄格子がはまっていて、まるで牢屋だ。

そして

●ファーンニッシュ（家具付）

家具とは、ごみ置き場でひろってきたベッドや、ソファ（モチロンぼろぼろにやぶけて

中の黄色いスポンジが飛び出している。）↑絶対にそこに寝たくない。

さらに

●トイレのドアが半分しか開かない

ベッドとソファで部屋が埋まってしまっていて、トイレ（バス）の扉が半分しかひらかない。↑太っている人だったら入れない。

プラス、

●シャワーと洗面所の水は茶色

蛇口からきれいな水は出ず、茶色い水がちよろちよろでるだけ。しかも排水溝はつまりっぱなしで水が流れない

最後に

●部屋中をゴキブリとねずみが走り回る

ここまでくれば「完璧っ」て感じた。

第一日目から不安たっぷりのスタート。

私は、初日から、ゴキブリやねずみにおびえて過し、ほとんど眠れず、

夜が明けたら、ダッシュで近隣のダンススタジオ「ステップス」へ

行った。

「ステップス」は74STのブロードウェイにある、有名なダンススタジオだ。

朝9時半からバレエのクラスがやっているので、とりあえず、朝のクラスを受けて

そのアトは、ステップスのきれいな木の廊下でバク睡した。

私のアパートに比べれば、ステップスの廊下は天国だった。

シャワーもトイレもほとんどそこですませた。

ステップスの廊下が我が家になり、多くの日本人が行ったり来たりするので

顔見知りができ、「お勧めダンスレッスン」の情報なども仕入れた。

NYで最初に覚えた単語は「プランジャー」。

日本語でも、なんとと言う名前か知らないから、辞書もひけない。

つたない英語で、デリ（コンビニみたいな24時間の店）に行つて

「トイレがつまって、水が流れないので、ごぼごぼってやるやつ」を一生懸命説明した。

「トイレット」と「くろつぐ（つまる）」という単語で、結構すんなり伝わり

「oh, you want a plunger!」（はい、プランジャーだね。）と、トイレのつまりを直す道具を手に入れた。NYでは、これなしには生きていけない！くらいの必需品だ。

NYでの最初の単語はプランジャー。

そして最初の教訓は「日本人経営に騙されるな!」

追記

ステップス「Steps on Broadway」
<http://www.stepsnyc.com/> ht

ジャズ、バレエ、タップダンス。

特に朝のバレエには、あの映画「ホワイトナイト」で有名になったバルシニコフもきていた。

バレエ大嫌いだった私だが、バルシニコフ見たさに朝のバレエを受けていた。

他にも朝のバレエには、NYシティーバレエの団員などが多くきていた。

今はもういないみたいたが、私は当時「スージーテイラー」という先生のクラスにめっちゃめっちゃはまって

月曜から金曜まで毎日彼女のクラスを受けていた。

女性とは思えないダイナミックなジャズダンスの先生だった。

エピソード3 セックス アンド ザ シティー

ワンポイントイングリッシュ

● one night stand 〃 一晚だけの関係

NYは移民の町ってことはみんな知っている。

移民それは、NYで一旗あげたい人。

移民それは、NYで勉強したい人。

移民それは、他にすることがなく、NYでお金をばら撒く人。

移民それは、会社の転勤で仕方なく、NYにいる人。

移民それは、自分の国がまずしくて、自分の国では食べられない人。

移民それは、自分の国から逃げてきた人。

一言で移民と言っても、そのバックグラウンドは様々だ。

私の場合は上記の中の、2番目と3番目かな？

父の「しっかりと自分の道を探せ」という寛大な教育方針のもとに、たつぷりと時間とお金をもらっていた。

普通なら「社会に出る」年齢だが、父は「生涯勉強」と言って、私を旅に出した。

それなのに、当面のやりたいことさえ見えないままNYに来て、「毎日をもてあます」、という「贅沢病」をわずらっていた。

私が住んでいたアップパーウエストサイドはラティーノが多かった。ラティーノとは、メキシカン、ドミニカン、プエルトリカン、など

など、スペイン語をしゃべる茶色の人種。（日本人が黄色としたらの意味）

私のアパートのある、79STのあたりは、ほとんどのデリ（コンビニ）やビルでラティーノが働いている。

私の最初のセックスフレンド（以下セフレ）はジョージ。プエルトリカン。

背が高くて、かなり「イケメン」で、私のアパートの隣のビルで働いていた。

ラティーノの特徴としては、（かなり偏見はあるが）、仕事はかなりの加減だけど、
女を誘うのはめっちゃめっちゃ一生懸命やる。

アトについてきて、甘い言葉をひたすらかけたり、毎日のように、どこからかお花を持ってきて届けたり（↑たぶん買ってない）。
どれだけふられても、かなりの不屈の闘志を見せる。

寂しかった私は、それに、負けることがしばしばあった。
ジョージはやさしかったし、誰もいないよりは誰かいたほうが良かった。

ジョージの父もおじいちゃんも、そのまたおじいちゃんも全員ジョージという名前だった。
（ジョージザファースト、ジョージゼカンド、ジョージザサード、とか）。

私のセフレはジョージザサード。（ジョージ三世）。

ジョージの家族は父の代からNYに移住して、ジョージ（父）とジョージ（子）は英語をしゃべれるけど

おじいちゃんとおばあちゃんはスペイン語しか話せなかった。

ジョージとはなぜセフレだったか？って、いうと、それ以上には付き合えないのだ。

なぜならば、よく言いがちだが、「価値観の違い」だ。

あんなに誘うのに一生懸命だったのに、そのアトは頑張れないのだ。約束を守ったり、仕事をちゃんとしたり、昨日言ったことを覚えていたりできないのだ。

土曜に会う約束をしたのに、平気ですっぱかし、なにくわぬ顔で日曜に「Hi BABY」とか言って現れたりする。

最初は自分の英語力に不安があったため、「私が間違えたのかな？」と思ってみたりしたが、

「ねえ、土曜と一緒に映画行ってくって言わなかった？」ってきくと

「ああ、ごめんね。急におやじに用をいいつけられて、、」とか、そこで初めてあやまる。

だからと言って、電話も連絡もしないですっぱかすのはおかしい。

ごめんね、って言っているけど、キスとハグとセックスで解決できると思っている節がいなめない。

話をきいていると、「女は、花を贈ったりして持ち上げて、あとはセックスで黙らせればいい」という

ものすごく封建的な考えが見えるのだ。

超大昔の日本みたいな、「女は子を産む道具」的な考えで、女は勉強もしないでいいし

言うことをきいている！そうすればやさしくして、セックスで喜ば

せてやる！という言い分だ。

ああ。私、無理！

黙って言うこときけ！も無理ならば、セックスをチカラワザで持ってこようとしているところも無理。

それでも、寂しかった私は、ジョージの次にも、そのまた次にも沢山のラティーノとつきあった。

NYでの出会いの場の多くは「ホームパーティー」だ。

普通日本では「全く知らない人の誕生日会に行く」とか、めったに無いことだが、

NYでは、沢山の留学生、沢山の単身赴任者、沢山の移民がいて、寂しい人間が山ほどいるから

「ホームパーティー」が頻繁にひらかれる。

そして、そのほとんどが、「友達の友達の友達のそのまた知り合い（ほとんど接点無し）」

でも誘われたし、足を運ぶことも珍しくなかった。

最初は友達のいなかった私も、縁もゆかりも無いパーティーに行つて、友達ができ、

だんだんとその輪を広げていったのだ。

しかし、そのころの私がパーティーで出会うのは、「新しいセフレ」ばかりだった。

いや、セフレにもならないような、ワンナイトスタンドばかりだった。

同じように寂しく、同じように目的が見つけられず、ただNYに住み、寂しさとむなしさを誰かに埋めてもらおうとする人間。

私自身がそうであるから、同類ばかりがよってきた。

最初の3ヶ月は、パーティーとセフレと寂しさとむなしさと焦りで過ぎていった。

エピソード4 エンジン始動！

ワンポイントイングリッシュ

● transfer (トランスファー) 〓 移動。転校する。

忘れがちだが、私は学生ビザでNYに来ている。
ということは、フルタイム(朝9・午後3時)で学校にいないといけないのだ。

なのに、なぜ、生活がパーティとセフレで埋まってるのか？
理由はこうだ。

← フォードダム大学の英語講座をとることでビザを取得した。

← 登校して授業を受ける

← 日本で大学まで出してもらった上に、「はい！では教科書をひらいて」とか言って、いい大人が
英語を教えてもらう授業にうんざりする。 ↑ 勉強の仕方は知っているから、自分でできるはず。

← しかも、英語学校に通ううちは、ほんものの「アメリカ人」には出会えないことに初めてきづく。

英語学校の先生は、親切丁寧なスピードで、わかりやすくしゃべるけど、NYの町でそんなしゃべり方をするのは
政治家か、英語教室の先生だけだ。日本で「N・V・A」などに通うのと一緒なことだ。

←
1週間で退学。

←
次の学校を探すまでの執行猶予がある（たしか30日だが、40日間）

というわけで、次の学校を見つけて、手続きをするまでは、ふらふらしていても大丈夫というわけだ。

ダンスがしたいのだから、ダンススクールでビザを取得すればいいのでは？

という疑問があるに違いない。

その通りだ。

NYで暮らして1カ月ほどで、お気に入りの先生やクラスを少しだけ見つけた。

ジャズダンスとバレエのクラスをいくつか。

だが、私が本当にやりたいタップダンスではなかった。

タップダンスのクラスを色々受けても、「そこそこ楽しい」だけで、何か求めているものと違った。

さらには、自分が何を求めているのか？がわかっていないのだから、なかなか見つかるものではない。

苛立つ毎日の中、出会ったのが啓太だ。

彼は熱かった。

パーティーの毎日で、なんとく、「みんなこんな感じか」と意識レベルがどんどん低下していく私の目に

啓太は熱く映った。

日本で役者を目指していて、今、NYに勉強にきている。

英語は頑張って自分で勉強して、今「ストラスバーグ」という演劇学校に行っている。

「ストラスバーグ」は、かなり厳しいけど、面接で受ければ入れる。

と教えてくれた。

「啓太」という人間の魅力が響いたのか？

「アクティング」という文字に心がひかれたのか？

その両方か？

久々に、目的意識を持って、明るい顔をして、強いエネルギーを持った人間に出会った私は

本当に久々に自分らしいエンジンがかかってきた。

「アクティングスクール」いいかも？って。

早速、面接のアポ（予約）をとり、面接に合格し、リストラスバ
ーグで勉強することになった。

リストラスバーグとは、あのミュージカル「コーラスライン」でも、演じられている悪名高き

「へんてこな演劇学校」のことだ。（↑自分が「風」になりきったり、「アイスクリームコーン」になりきったりする

変てこな演技指導。↑コーラスラインより）

演劇の内容がどうこうではなく、私にとって大切だったのは、「何かをはじめることだった。

私は、エネルギーのある啓太に出会って、エネルギーのある活動と人間性を取り戻しはじめていた。

追記

リ ストラスバーク <http://www.strasberg.com/>

一時期、ヨーロッパ、アメリカで一斉を風靡した演劇学校。

ドイツ生まれの学校なので、現在も生徒の多くはヨーロッパ人だ。

古くは マリリンモンロー、ジェームスディーン、最近ではロバートデニーロや

アンジェリーナジョリーなど、多くの有名俳優もこのメソッドを勉強した。

Sense of memory (センス オブ メモリー) という、メソッドを基盤として、

人間の中に眠っている記憶を呼び起こし、「今、あたかも、・・・がおこっているかのように感じて、演じる」という指導方法だ。

私を通った1996年当時でも、多くの有名人がそこで勉強したという名声と、その「へんてこメソッド」による悪名の両方が耳に入ってきた。

しかし、私にとっては、ジェームスディーンに教えたことのある先生から習うのは、なんとなくアメリカ人の仲間入りしたようで、少しうれしかった。

エピソード5 シーンパートナーを探せ！

ワンポイントイングリッシュ

● insecure (インセキュア) 〓 自信が無い。不安定な。
日本で言う、「コンプレックスを持ってる」「みたいな感じ」

● hilarious 〓 ばかうけ。超うける。
へらりオス

アクティングスクールでは、1クラスの長さが4時間。↑めっちゃめちゃ長い。

各教室が、すり鉢型の劇場っぽくできていて、生徒は、おのおの、自分で選んだ台本やシーンを練習してきて、クラスの前で演じるのだ。

毎クラス、前に出てやるわけではない。

自分で「何週間後にやろう!」とか決めて、ブッキングしてそれに向けて練習するのだ。

先立ってやらなくてはいけないことは

● 先生に紹介してもらった「台本を売っている店」などに行つて、色々な本を読む

<http://www.bentheague.com/productions/scripts.html>

● 「シーン」を演じるには「シーンパートナー」が必要だから、クラスの中で「シーンパートナー」を見つける。

ここで、問題が生じた。

この学校にきている人は「役者になる」とか「ハリウッドを目指す」など

結構、がつつりした目標をもって、クラスに出席している。

ということは、「英語が不自由な日本人」とか「なんとなくスローでぼけぼけしたやつ」にかまっている暇は無い。

すなわち、私のシーンパートナーになろう！なんて人がいないのだ。

私は、先生に教えてもらった「初心者向けのスク립ト」候補をいくつか読みながら考えた。

私も、もともとは、舞台に立ちたくてダンスをやっている。
毎クラス、毎クラス、人が舞台に立って演じるのを
指をくわえてみているのは、かなりのストレスがたまった。

そこで、強硬手段に出た。

まだやることも、パートナーも決まっていけないのに、ブッキングをしたのだ。

そして、数あるスク립トの中からモノログ（一人芝居）を選んだ。

クリストファー デウラン（Christopher Duran）
という人の短編集。

その中で1個「NYのスタンドアップコメディアン」のモノログがあった。

「スタンドアップコメディー」とは、日本でいう漫才みたいなもので、

コメディアンが一人でしゃべる、トークショーだ。

多くのハリウッドのコメディ俳優が、このスタンドアップコメディーの出身だ。

(ビル・マレーとか、ダン・アイクロイド などなど)

この台本には「売れなくて、自信の無い(insecure)な女のスタンドアップコメディアン」が描かれている。

その当時の、私にぴったりのような気がした。

私の語学力では、ジョークの内容は全く「意味不明」だったが、私の想像ではたぶんこんな感じ。

←

「シモネタや、時事ネタを含み、面白おかしく、書かれていてまた「売れない感じ」が若干の悲壮感を漂わせて、絶妙な笑いをさそう。」みたいな。

自分が何をしゃべっているのか、全くわからないけど、とりあえず暗記して、

自分なりに「ここは面白いだろう」(想像)ってところは

テンポを出してしゃべったりして、練習して、いざ！発表の日を迎えた。

一人で舞台にたって、クラス中の注目を集めると、かなり緊張した。

私が「hi, my name is ●●, and I am a stand up comedian」話しをはじめると、クラス中が静まりかえった。
↑はあ？コメディアン？ みたいな。

私は相変わらず意味のわからないまま、ぺらぺらとしゃべった。すると、センテンスごとに、「くすくす」とか、「はっ」とか、「ふっ」とか小さくためらいがちの笑がおこった。

モノログの中盤にさしかかると、その笑いは確実なものになり私も少し落ち着いてきた。

そして、モノログ終盤には、クラスは笑いと歓声につつまれたのだ。

「ひつつつつ」

「はっはっはっはっ」

「ひゅーひゅーひゅー！」

私は「自信が無く、コンプレックスを抱える女の子」を演じたまま、しゃべり終えると

「B Y E」と言ってそそくさとステージを去った。

（↑売れないコメディアンが罵倒を浴びながら逃げるようにステージをアトにする感じ、のつもり）

ああ、気持ちよかったああああああ。

何が面白いのか、一切わからなけど、めっちゃめっちゃうけたし！

最高のビギナーズラックだね。

ってか、台本の勝利だね。

クラスが終わると一人の男の子が声をかけてきた。

Hey, you were hilarious! (超面白

かったわ〜。)

Everybody almost doubted, this
cute little Japanese girl,
actually saying those dirty
words and all that, you know?

(この小さい日本人の女の子が、あの汚い言葉とか、悪態をついたりして

「え？今なんて言った？」って、みんな耳を疑ったよ。笑)

彼の名は、ブライアン・ガズマン。血はドミニカン(ラティーノ)。黒い髪、黒い目。国籍アメリカ。俳優志望。

この日から、私とブライアンの長い、長い、友情が始まった。

ブライアンは私が「今、会いたい人」のトップリストだ。

あの出会いの日から、5年間、私たちは深い友情で結ばれたが、ブライアンがキャリアを求めてロス(LA)に旅立ったときと私の「がんによる急遽帰国」が重なって、連絡の方法を失ってしまったのだ。

ブライアンは「ロスでの落ち着き先が決まったら電話するね」って言うていたのに、

その間に私はNYのアパートが無くなってしまって、ブライアンと私をつないでいた

唯一の電話番号(私のNYのアパートの電話)が無くなってしまったのだ。

時折、無償にブライアンに会いたいときがある。

この「ネット情報時代」に、見つけれないのか？って
思つかもしれないけど、見つけれない。

無償にブライアンに会いたいときがある。

●クリストファー・デウランの紹介←

<http://www.christopherdurang.com/Biography-Short.htm>

●クリストファー・デウランの短編集←

<http://www.amazon.com/Christopher-Durang-I-Short-Plays/dp/188039989X>

● 台本を探す←

<http://www.benteaque.com/productions/scripts.html>

エピソード6 初めてのブロードウェイオーディション。自由の国アメリカは

ワンポイントイングリッシュ

● minority (マイノリティー) 〓 少数派。(白人以外の人種)

● union (ユニオン) 〓 組合、労働組合。

さて、私は「役者志望」に方向転換したわけではない。
なので、あいかわらず、「何か」を探し続けていた。

ブライアンが教えてくれたのは、新聞「Back Stage」。
ニューヨークで毎週創刊されるこの新聞には、ブロードウェイから
オフ・ブロードウェイ、オフオフ・ブロードウェイ、のあらゆる情
報が載せられていた。

役者募集

ダンサー募集

シンガー募集

アジア人募集

コメディアン募集

ミュージシャン募集

照明技師募集

音響技師募集

募集、募集、募集。

記事を見ているだけで、心が躍った。

そして見つけた！

ミュージカル「42ND Street」ダンサーズコール（
ダンサー募集）

おおおおおおおおおお。

このミュージカルは私がタップダンスをはじめるきっかけとなった
ミュージカルだ。

私はその記事を見たときから、もう主役の「ペギー」を演じる自分
を思い描いていた。

募集記事は以下のような感じ。

←

42ND STREET

ダンサーズコール（ダンサー募集）

1996年 サマーストック（夏のツアー要員）

要 タップダンス技術

すべての人種歓迎

すべての人種歓迎！

すべての人種歓迎！

すべての人種歓迎！

うひょおおおおおお。 ↑完全に舞い上がる。

ブライアンの情報で、ダンサーズコールは1次がダンス。
2次にすすむと歌があるという。

（シンガーズコールは逆で、1次が歌で、2次がダンス）

当然、2次に進む気まんまんの私は、ボイストレーナーについて、歌う歌をきめ（ミュージカルナンバー）練習にはげみ、オーディション用のレオタードを準備して会場に向かった。

会場で私が見たものは、

白人と白人と、白人と、白人と、白人。と白人。

しかも、全員知り合いの様子。

全員がばつちり舞台メイクをして、手には8×10（A4サイズ）の写真を持って立っていた。

みんなが、私をじろじろと眺める。

私が手に持っていた写真は、小さなスナップ写真。

メイクも普通。

そして何より、白人じゃない。

振り付けがはじまると、そのほとんどの人が、タップが「ど下手」だった。

振り付けも半分も覚えずに、適当にやっている。

そして全員が踊り終わると、プロデューサーのおっさんが言った。

Some of you indeed, have excellent feet, however, (あなたたちの中には「完璧な足」を持っている人がいます。しかし、)

Please understand that we are looking for a certain type, (私たちが、ある特定の「タイプ」を求めていることをご理解い

ただきたい)

じゃあ、そう書いとけ!!!

そのおっさんは、明らかに私に向かって、「場違いな場所にくるな」と言っていた。

私は本当に悔しくて、腹が立ったけど、そこで合格した人たちを見ても

その人たちと一緒に踊ったり、仲間に入りたいとは、全く思わなかったので、

悲しい気持ちはしなかった。

あとで学習したところによると

● All minorities are welcome to audition!

(マイノリティー(白人以外)歓迎!)

と書くのは、「白人のみ歓迎!」って、書くと、訴えられるからだそうだ。

よく見ると、アジア人募集とか 黒人募集とか、ラティーノの募集とかのときは

ちゃんと指定して書いているのに、あまり「白人募集」とは書いていない。

●ユニオンかユニオンじゃないか

ブロードウェイショウの多くはユニオン(協同組合)に加入している。

共同組合とは、簡単に言うと「もちつ、もたれつ」(?)みたいな。

組合は、組合に加入しているダンサーに優先的に仕事を与えて守ってあげるかわりに

ダンサーは、組合以外の仕事はしないと約束する。という形で、お互いを守る。

だから、オーディションでも、まずユニオンに加入しているダンサーを優先的に合格させて

どうしても、ユニオン内で見つからない場合のみ、別の人にチャンスを与える。とのことだ。

では、ユニオンに入ればいいのでは？と思うだろう。

だが、そう簡単にだれでもホイホイ加入させたら、ユニオンの意味が無いのだ。

ユニオンのおこぼれに預かった仕事を、運よく2〜3回繰り返したら、ユニオンに入れるかも？

みたいな感じだそうだ。

自由の国アメリカは、「訴訟をおそれる国」アメリカであった。

「とにかく、訴えられることから身を守れ！」が一番で、自由はその次だった。

日本に住むアメリカ人の友人と話しているとき、私がアメリカの「門戸の狭さ」について指摘すると、彼はいきり立った。

日本の、外国人に対する門戸の狭さは、アメリカとは全く比にはならないという。

たぶん、彼が正しいであろう。

アメリカとは、他の国と比較したときに、「比較的、外国人にもチヤンスを与える自由の国」なのだろう。

私は、タップダンスをはじめた時に夢見ていた「42ND STR
EET」の夢が、あっさりと崩れ去ったので
まだ「本当にやりたいこと」が見つけられずにいた。

追記

● Back Stage ↑
[http://www.backstage.com/bso
/index.jsp](http://www.backstage.com/bso/index.jsp)

エピソード7 R & a m p・Bデビュー

そのころ私は、あるホームパーティーで、ある人間と出会っていた。

彼女の名はシャーリーン。

アフリカン・アメリカン（黒人）。30代前半。

超美人。2回の結婚と離婚。子供3人。

彼女は自称「音楽プロデューサー」。

私が日本人だと知ると、彼女は目をキラキラさせてたずねた。

「うっ たーだ？ DO YOU KNOW？ うっ たーだ？」

とても有名な日本のミュージシャンで、「うっ たーだ」という人を知ってるか？という。

私は「????」全然きいたことない。と答えた。

シャーリーンの話は以下のとおり。

その有名なミュージシャンには14歳の娘がいて、ごく最近、シャーリーンがプロデューサーして、CDを制作したばかりだという。

ユニット名は「CUBIC・U」（キューバキュー）。

14歳の日本人少女と、15歳の黒人少年のR & a m p・Bユニット。

なぜ彼女がそんな話を私にするのか？

それは、そのR & a m p ; Bユニットを日本の企業「EMI」（東芝）に売ったら、かなり当たったから、また、日本人をプロデューズしたい！ということらしい。

「私、歌、歌えないよ？」と言うと、

シャーリーンは「いいの、いいの。私たちに任せて！りずむはダンスが得意ならダンスを生かせばいいし！何より、日本人ってことが肝心だからね！歌なんてなんとかなるよ！」と、かなりのお調子ものだ。

私は特にまだ「やりたいこと」が見つかっていないので、じゃあ、やってみてもいいよ」と適当に言った。

シャーリーンのチームは、当然、みんなアフリカン・アメリカンだ。

- シャーリーン 総合プロデューサー。（作詞も担当）
- バート 作曲とレコーディングエンジニア
- ジェイ ボーカルコーチ

そのほか、スタジオにはいつも、沢山のラッパーやR & a m p ; Bシンガーがたむろしていて、入れ替わり、立ち代り、私に歌を教えてくれたり、英語を教えてくれたりしていた。

シャーリーンと出会ってしばらくすると、他のメンバーが決まった。

- ジューン

国籍・マレーシア。血・中国。5年前から

NYに在住。ダンスを主にやっているが、歌もそれなりにうまい。

●シモン

国籍 スイス。 血・韓国。韓国人の両親を持つが、生まれ育ったのはスイス。歌を専門にやっていて
ビリーホリデーのような声を持つ。

スイス・ジャーマン（ドイツ語）、イタリア語、英語、フランス語、ポルトガル語をあやつる。

●と、私。りずむ

国籍・日本。血・日本。特技・タップダンス。歌は歌えない。笑。

の3人組だ。簡単に言つと「日本・中国・韓国」のトリオ、みたいな？

私たちは、すぐに仲良くなった。

特にジューンは私のアパートから、歩いて5分くらいのところに住んでいて、

毎晩のように、私を、夕食に招いた。

ジューンは口うるさかった。

まず、ちゃんと食べること。

そして、ちゃんとしゃべること。（正しい発音で）。

さらに、ちゃんと意思表示をすること。

ジューンもシモンも、かなりのマシンガン・ガールズ・トークだ。
+シャーリーンになると、スーパー・マシンガン・ガールズ・トーク。

その会話のスピードや内容に、私がついていけるはずは無かったが
ジューンはいつも、「HEY!」と言って会話をとめて
「りずむは？りずむの意見きいてない。りずむちゃんとチームの
一員として、話に参加しなさいよ!」
と、うるさく、そして辛抱強く、私のスローな英語につきあった。

私たちは3人とも20代前半で、ほぼ同じ年齢だが、ジューンは私の
数倍しっかりしていた。

リードボーカル シモン
セカンド ジューン
おまけ りずむ

スタジオでレコーディングしたり、
アーティスト写真をとったり、
ユニット名を相談したり、
英語や歌を習ったり、
パーティしたり、
合コンしたり、
さらには、アメリカで働けるように、移民局に「ペーパー」（ビザ）
について相談に行ったり、

3人で色んなことをして、3人で色んなことを話した。
NYに来て、はじめて、「一人じゃない」と感じられる時間を過した。

ジューンやシモン、シャーリーンやバートにとって私は、「家族
の一員」だったし、
私にとっても、彼らは「家族」だった。

私の歌は、全く上達しなかったが、（そんなに一生懸命やってないし）

私の英語の会話力は、かなりUPした。

「ファミリー」のチカラだ。

シャーリーンが言っていた「うつ、たーだ」とは誰だったのか？
私とその人物を知ったのは、それから5年たって「宇多田ヒカル」
が日本でデビューしてからのことである。

追記

- Cubic-U（キューバキュー）

宇多田ヒカルの日本でデビュー前の、アメリカでデビューしたユニット。

CD「Precious」をリリース。

[http://ja.wikipedia.org/wiki/Precious_\(Cubic-U\)](http://ja.wikipedia.org/wiki/Precious_(Cubic-U))

エピソード 8 1996年 運命の年「RENT」

私がNYに移住した1996年。

この年には、私にとって、運命的な出会いが重なった年だった。

まず、移住して3ヶ月。

この時期が一番寂しくて、ホームシックになったりして、ふんばりどころって言われている。

私も、例にもれず、かなり重度のホームシックにかかった。

日本、東京、日本の友達が恋しかったし、

私はまだNYに「居場所」を見つけられてなかった。

特に、一緒に過す友人も無く、予定の無い、晴れた土曜日。私はブロードウェイに沿って、ミッドタウンを歩いていた。

ミッドタウンとは、マンハッタンの真ん中のあたり。

30丁目〜60丁目くらいのことを言う。

よく、みんながニュースや映画の中で見る

タイムズスクウェアや、劇場街があるところだ。

ミッドタウンは、一年を通して観光客と、そうでない人で、

ひたすらごったがえしている。

特にブロードウェイ沿いはひどいので、私は人をさけて、9番街を下（南）に向かって歩いていった。

目的も無く、行くあてもないけども、一人でアパートにこもっているには

天気良すぎて、気晴らしがしたかった。

42ストリートのあたりまで歩くと、あるミュージカルの看板が目
に付いた。

「RENT」。

ミュージカル「RENT」。

ちょうど、昼の公演が始まるところだったので、適当に1枚チケットを買って入った。

なんか「社会派ミュージカル」、賛否両論。とかいう記事を、以前
どこかで読んだ気がする。

「どうせ、あんまり話、わかんないんだろうな」と
と始まる前から消極的な姿勢で幕が開くのを待った。

「RENT」は衝撃的だった。

私が今住んでいる、NYの町、NYの若者、が、ひとつのアパート
に雑居している様子が描かれていた。

映画監督を目指すもの。

俳優を目指すもの。

ロックミュージシャンを目指すもの。

レズビアンのカップル。

ゲイのカップル。

そいつらの日常が「生き生きと」と描かれていた。

でも、「生き生き」だけじゃなく、その「挫折」と「苦悩」と「問
題」も多く描かれていた。

そして、自分の娘や息子をNYに送りだした、母親たち「が入れ替
わり、立ち代り、子供たちに留守番電話を残す。

「元気にしてるの？電話ちょうだい。ママより」

「ちゃんと食べてる？ ママより」

「彼女とはまだ続いてるの？今度一緒に食事がしたいわ。ママより」

ああ、どこの世界も「ママ」は一緒だね。

そして、NYに何かを求めてやってきた、私たちは同じだね。

そして、今はまだ電話に出られない。弱音を吐いてしまうから。

みんな、故郷に帰りたい気持ちを押し殺して、「何か」をつかもうとしているね。

って、思った。

このミュージカルを見終わったとき、「この町でもう少しがんばろう！」という決意が

私の中に、みなぎっていた。

あとで、知ったことだが、この「RENT」の作者。

ジョナサン・ラーソンは、このミュージカルに10年近い年月を捧げていた。

1996年、オフブロードウェイで初上演。

上演と同時に「社会現象」を巻き起こし、空前の話題作となった。

にもかかわらず、ジョナサン・ラーソン彼は、その年、35歳の若さで急死するという悲劇に見舞われた。

私がNYに移住した、4月には、この「RENT」は、ブロードウェイの大劇場で上演され

たのに、彼がその事実を知ることには無かったのだ。

その後、「RENT」は多数のトニー賞や、ピューリッツァー賞を受賞したが、その事実も彼は知らずに、この世を去ってしまった。

この、作者自身の「ブロードウェイを目指した若者のサクセスストーリー」と急死の悲劇」と

「RENT」の世界自体が重なって、話題性はさらに増し、人々に多くの感動や、感銘、感慨とパワーを与えたのだ。

私は、その日から、何かあると、家で「RENT」のCDを聴いて、大声で熱唱してふんばり、

また、くじけそうになったら、劇場に足を運んで、何度も何度も「RENT」を見て、

励まされて、NYでの生活に踏みとどまったのだ。

私がNYに移住した年、1996年4月。

「RENT」がブロードウェイの大劇場で上演開始した年、1996年4月。

エピソード9 1996年 運命の年「ノイズ・ファンク」

私がNYに移住して、半年が過ぎようとしていた。

そろそろ、「何か」に出会ってもよさそうだ。

たとえば、セフレじゃないほんとの「男」(a s i n a m a n?) とか？

たとえば、タップダンスで、「師」と仰げる誰か、とか？

私は、アッパーウエスト、79STの自称「地獄谷アパート」から引越して、

ミッドタウンの50ST(西)に住んでいた。

相変わらず、セフレと、なんとなく受けるタップのレッスンと、あと、

アクティングスクールと、あと、例のアジア人3人組みのユニット。

全部なんとなく、やっている。

いつも、なんとなく、寂しい。

なにか、とてつもなく、手ごたえが無い毎日だ。

そろそろでしょう？

もう出会う時期でしょう？

何も無ければ、もう帰る時期でしょう？

そして見つけた！

「Bringin' Da Noise, Bringin' D

a Funk」。

通称「ノイズ・ファンク」。

「RENT」と同じく、オフ・ブロードウェイで数年あたためた後、この年に、ブロードウェイにあらがってきた。

黒人の歴史を、タップダンスと、語りと、歌でつづる、ブロードウェイミュージカル。

50STの私のアパートから徒歩1分の場所にあるシアター、アンバサダー。

何のミュージカルかも知らずに、「ラッシュチケット」を購入して劇場に入る。

ラッシュチケットとは、公演の当日分のチケットを15時から、安く販売するシステム。

席は選べないけどとにかく安い。

ノイズ・ファンクのラッシュチケットは19ドルだった。（2000円くらい）。

オープニングから、鳥肌が立った。

今までに見たこともない、タップダンスのスタイルと、ファンクの音楽。

バケツ・パーカッションとの、激しいセッション。

激しいリズムのやりとりと、黒人のおばさんの図太くて、心が震える歌声。

完全にカルチャーショック。
見つけた！

見つけた！

見つけたあああああああああ！

と、叫びたかった。

あるじゃないかあああああああ。

ニューヨーク。

いるじゃないかあああああああ。

ニューヨーク。

後で知ったことだが、このミュージカルの作、演出、振り付け、主演は、

タップダンスのカリスマ「セビアン・グローバー」。

私が日本で何百回、何千回、繰り返し見た映画「TAP」（主演故グレゴリー・ハインズ）

に出演していた、あの天才タップ少年だ。

家に帰って、それを知ってから、さらに鳥肌が立った。
↑遅い。

見つけた！

手が届くところにいる。

実際、我がアパートから、歩いて1分の距離で毎日踊っている。

そして、クラスも教えている。

クラスも見つけた。

ノイズ・フランクの出演者が教えるタップのクラス。

セビアン、オマー、ジミー・テイト。

セビアン、オマー、マーシャルデービス。
セビアン、オマー、ジェイソン・サミュエルズ。
セビアン、オマー、マーク・メンドルサ。

笑。→マニアックな名前の連鎖でごめん。
でも、これ、みんな、タップの達人。

そして、MORE!!!!!!

私が、この後、多くのタップのマスターたちに出会うまでは、まだ少し時間がある。

その前に「男」も見つけた。

NO MORE セフレライフ!!!!

ノイズ・フランクに出演するダンサー達のレッスンを受けるようになる。

自然と沢山の日本人の友達ができた。

ニューヨークには、タップを学ぶ日本人が山ほどいることがわかった。

その中の一人がサム。日本人だけどサム。笑。

もう、長いことニューヨークに住んでいて、色々なことを教えてくれる。

いわば、ニューヨークの主？

私とサムは出会ってすぐに、直感でつきあうことを決めた。
サムとつきあって、一緒に住むようになって、半年以上たった

ある日、私は、日本から持ってきた手帳に「ふっ」と目をやった。

日本を出る前に、アメリカに行ったことがある人に、「アメリカ行ったらどうしたらいい？」と漠然と尋ねたところ、

「サムっていう日本人がいるから頼っていけば、色々教えてくれるよ」

と、サムの名前と電話番号を教えてくれた。

ニューヨークに来て、私は寂しかったし、情報もなかったが、なぜか、

かたくなに、その電話番号に電話することはなく、「日本人とはつきあわない」と思っていた。

「日本人とつきあうと、アメリカにいる価値が薄れる」くらいの勢いと、つつぱり？だったのだと思う。

サムにその手帳を見せて

「ねえねえ、これサムが私と一緒に住む前の電話番号？」ってきいたら、答えはモチロン「YES」笑。

出会うときには、出会うものだ。

あがいても、あがいても、出会わないときは出会わない。出会うときは必ずくる。

と、実感してきた、ニューヨーク生活、半年過ぎだった。

追記 セビアン・グローバー ノイズ・フランクのシーンが見れるよ

6UUMLW8JUS4
http://jp.youtube.com/watch?v=

エピソード10 1996年 運命の年「セント・ピーターズ」

ミュージカル「ノイズ・ファンク」と出会い、そしてサムと出会った私の前に

広がったのは、「リズムタップ」の世界。

以前に私がオーディションを受けた、ブロードウェイのタップダンスは、

「タップ」よりもほかの「ダンス」の要素が強い。興業を目的として、白人が作ったスタイルだ。

しかし、この、「リズムタップ」は、もともと、黒人が、自身の表現のために

全身を使って、リズムを生み出す。音楽や、楽器としてのタップダンスだ。

1996年、「ノイズ・ファンク」がブロードウェイで始まったこともあり、

ニューヨークでのリズムタップシーンは盛り上がりつつあった。

この年に、始まったものがもう一つ。

「SWING46」のジャムセッションだ。

バスター・ブラウンがホストをつとめ、毎週日曜に行なわれていた。

ジャムセッションとは何か？

レストランやバーで、普通にお客さんがご飯を食べたり、飲んだりしている。

そこで、ホスト（司会者）とバンドがいて、音楽の演奏をしている。そして、楽器を持ったミュージシャンや、タップシューズを持った

ダンサーが

次々にやってきて、ホストの司会で、次々に演奏したり、踊ったりするのだ。

いわば、即興ライブ。

こんなのは、はじめてだ。

すごく緊張するけど、すごく楽しくて、わくわくする。

そして、タップダンサーが山ほどいる。

アメリカ人、日本人、フランス人、ドイツ人、ポルトガル人、オーストリア人、、、。

そして、夜の8時を過ぎるころ、日曜の「ノイズ・ファンク」の公演を終えた、

セビアンをはじめ、出演者たちがどかどかと押し寄せる。

ほんとに「どかどか」と押し寄せて、散々舞台上で踊ってきただろうに、また、めっちゃめっちゃに暴れる。

暴れん坊の彼らだが、バスター・ブラウンへの「敬意」を払いに、ジャムセッションやってくるのだ。

彼らもまた、ジャムセッションで育ってきたダンサーだから。

ジャムセッションに通いはじめ、リズムタップに夢中になりはじめたある日、

サムが言った。

「今日、教会で、亡くなったマスターを追悼するメモリアルがあるけど行く?」

まず、「メモリアル」ってなに?

思い出？↑それは「メモリー」 ↑英語力ゼロ 笑。
マスターって誰？

と、何もわからない私だったが、ついていくことにした。

教会は有名な「セント・ピーターズ」。

大きな趣のある教会で、入り口には、沢山の人の列ができていた。
並んでいる間に、サムが、その日の趣旨を教えてくれた。

●近年、連続して3人のマスター（歴史的なタップダンサー）が亡くなった。

●その追悼をこめて、アメリカ、世界中から、タップダンサーや、
縁のあるミュージシャンが集まっている。

●今日は、入り口でサインして入場して、踊りたかったら、「踊りたい人」のところに名前を書く。

とのこと。

え？「踊りたい人は名前を書く」の意味がわからない。
じゃあ、書かないでいいや。

サムは、「踊りたい人」のところに名前を書いている。

知人、友人が多いサムのおかげで、私とサムは、教会の前から2列
目のど真ん中に
すわらせてもらった。

私の前には、松葉杖で、1本足の老人が座っている。
祭壇の横には ずらっとノイズ・フランクの出演者が並ぶ。
サムの隣には90歳くらいのおばあさんが座った。

司会のジミー・スライドが、1列目に座っていた人たちを次々に紹介していく。

昨日今日、リズムタップに出会った私が知っているのは、バスター・ブラウンだけだ。

だけど、司会のジミーも、バスターも、その次の人も、その次の人も、そのまた次の人も、みんな、「ものすごい」。

「ものすごい」って、何？って、思うけど、
「ものすごいオーラ」かな？

一人、一人が個性的で、チャージングで、オシャレで、とにかく素敵！

そして、私の前に座っていた、1本足の老人の番がきた。
司会者が「ペグ・レッグ・ベイツ」と紹介した。
サムが、ペグ・レッグ（P e g l e g）は「義足」のことだよ、と教えてくれる。

確かに、その老人は、片足のひざから下が義足であった。
80代後半か、90歳と思われる。

義足の足では、支えきれずに、手には杖を持っている。

司会者によばれた、ペグ・レッグ・ベイツ。

私は、まさか？って、思ったけど、もちろん踊る。

ゆっくりと立ち上がり、ステージに歩いていった。

義足の足と、杖と、そして、自分の足との3本の足。

その3本の足で、リズムを奏ではじめた。

会場のもの、すべてが、ため息と共にその姿を見つめた。

「美しいモノ」を見るときのため息だ。
ああ。

なんて、きれいなんだろう。
なんて、素敵なんだろう。
ああ。

ペグが踊り終えたとき、会場は割れるような拍手と歓声につつまれた。

私の目にも感動があふれ出てきた。

私は、そのとき、本当の手ごたえを感じていた。

「私、絶対、このファミリーの中にいれてもらう！」って、思った。
リズムタップの世界。

リズムタップのファミリー。

絶対にこのファミリーの一員になりたいと、強く思った。

その後、しばらくして、マスターたちがすべて踊り終えて、他の参列者を紹介する番になった。

司会者がサムの名前を呼ぶ。

サムがステージに上がって行こうとする。

私は、あわてて、ちよっと待って！ちよっと待って！ちよっと待って！

私も、私も踊りたい。

私も連れてって。お願い。

私は必死だった。

今、私が受けた感動を抑えきれなかった。

ここにきて、はじめて、「踊りたい人は記帳する」の意味がわかった。

お願い、私も躍らせて！

後ろの方の席から、もう一人夢中で走ってくる少年。
KAZU。

「俺も、一緒に躍らせてくれ！！！」

サムは、私とKAZUの勢いに圧されて、3人で踊ることになった。

その後は、無我夢中で踊って、あまり覚えていない。
覚えているのは、三人で踊り終わったときの大歓声と拍手。

あの教会で、マスターたちと出会った、あの瞬間と、
靴をつかんで、夢中でサムの後を追ってステージにあがったことと、
そして、三人で踊ったあとの大歓声。

これだけは、覚えている。
いつまでも、覚えている。

追悼の会が終わると、サムの隣に座っていた、老女が声をかけてきた。

「あなたたちは、素晴らしかったわ。これからも活躍を見てくださいよ。世界中のタップダンサーはみんな私の子供なのよ。
それに、あなたは、私の息子と同じ名前ね。私の息子も、サミーなの。」

サミー・デーヴィス・ジュニア。」

おおおおおおおおおおおおお。
なんてことだろう。

サミー・デーヴィス・ジュニアのお母さんだった。

びっくりと感動の連続がやっとはじまったのだった。

追記 セント・ピーターズ・チャーチ (54ST&LEX)

多くの、ジャズミュージシャンや、タップダンサー縁の教会。

←

<http://www.saintpeters.org/>

エピソード11 マンハッタンタップ

そして、はじめてのリズムタップのオーディションだ。

サムの情報で、「マンハッタンタップ」というタップダンスカンパニーがあることを知った。

昔NYには沢山のリズムタップカンパニーがあったそうだが

みんな、活動を休止してしまい、当時残っていたNY唯一のカンパニーだ。

正規のメンバーは、マイク（白人男性、20歳）、パリス（黒人男性、19歳）

オリビア（白人女性、30歳、フランス人）の3人だけ。

他の、正式メンバーがカンパニーをぬけてしまい

追加のツアーメンバーを募集している、ということだった。

（ちなみに、抜けたのは、ジョッシュとマックスとジーニー・ヒル

↑知ってる人は知っている　すごいタップダンサーです。知ってる人のために、書いときます。）

オーディション会場はリンカーンセンターのすぐそばの、YMCA。多目的ホールみたいな部屋で行なわれた。

50人〜60人くらいかな？

今度こそ、本当の「All minorities are welcome to audition!!!!」

（全ての人種大歓迎!!!!）

アジア人は日本人が何人か。

白人は、アメリカ人、フランス人、ドイツ人、ブラジル人、アムステルダム（↑これって国？）などなど。

黒人は全員アメリカ人かな？（アフリカン・アメリカン）。

全員が会場に入ったところで、カンパニーのディレクター、ヘザー・コーネルが

オーディションの趣旨を簡単に説明して、「まずは、一人ずつ「タイム・ステップ」を見せてほしい。」という。

「タイム・ステップ」とは、簡単に言うと、「自分のお気に入りのグルーヴ」かな？

ルールは無い。自分が思ったように、リズムパターンをつくれればいい。

「いきなり、一人ずつ?!」ってことで、緊張感が走る。

一番の白人女性性は、レオタードとハイヒールというブロードウェイスタイルの「オーディション服」を身に着けている。

そして、いきなり、全然、タップが踏めなかった。

私が以前、ブロードウェイのオーディションに行ったとき

「完全に場違い」だったのの「逆バージョン」だ。

ヘザーの意図が見えた。

50人〜60人集まって、全員に踊ってもらって、徐々に落としていく方法が一般的だけど

最初に一人で踏んでもらえば、その人がリズム・タップのスタイルを勉強しているかどうかすぐわかるのだ。

それと、踊れない人に振り付けを教えるのは時間がかかりすぎる。

というわけで、1次審査の終了時に、明らかにリズムタップを学んでいない人だけがカットされて、40名くらいになった。

2次審査は、カンパニーのスタンダードナンバーの振り付けを覚える。

教えるのは、現役スターダンサー（笑）のマイク・ミネリー。

マイクは顔が超ジョン・トラボルタに似ていて、常に若い女性の黄色い声援を浴びていた。

私には、わからない趣味なので「ふん。やっぱり白人的に、超イケメン」ジョン・トラボルタなんだ」と感心した。

ヘザーの振り付けは超楽しかった。

そのころになるとオーディションの緊張はどこかに行ってしまったひたすら夢中で覚えて、楽しんでオーディションを終えた。

そして20名くらいのダンサーが、三次審査に残った。

3次審査は、それぞれ、自分で振り付けをつくったり、インプロ（即興）をやったり、

とにかく、「自分が好きなこと」をやって見せてくれ、ということだ。

そして、三次まで残ったメンバーは全員、ヘザー的に「面白い」と思ったダンサーだったらしく

全員が「見習い」（アプレンティセス？）としてカンパニーに入団した。

入団したのは、私とサム（日本人）、マリアとリス（アメリカ人・白人）、シャローンとアロン（アフロ・アメリカン）、シンシア（ブラジル）、マライカ（アムステルダム？）、そのほか10名くらいかな？ さすがに全員は思い出せない。

私のマンハッタンタップ活動が始まった。

カンパニーとは「会社」だ。

マンハッタンタップも、会社らしく、月曜～金曜の朝9時～午後5時までリハーサル。

会場は同じくYMCAの多目的スペース。

毎朝5時に起きた。

ウォームアップをして、早く練習がしたかった。

7時くらいにはYMCAに行っていたと思う。

YMCAのスペースは、9時～しか使えない。

その前は、AAミーティング（アルコール依存症の人が集まって励ましあう集会）が使っていた。

私は、毎朝早く行つて、AAの人たちを1分でも早く追い出そうとドアの前でがんがんタップを踏んでいた。

昼休みも同様に、12時～13時半まで AAミーティングの人が使っていて、入れない。

私は1分1秒でも多くタップを踏んでいたかった。

AAの人も、社会復帰しながら、アルコール依存を断ち切ろうと必死なのだろうが、私も、

リズムタッパーになろうと必死だった。

私とAAの場所の奪い合いは、毎日、朝と昼、続いた。

「見習い」で入団したダンサーたちは、みんな長いことリズムタップをやってきた、ベテランばかりだった。

そんな中で、振り付けを毎日3曲づつ覚えるけど、本当に「ステップができない」のは私だけだった。

私には、見るもの、全てが新しく、毎日が「できないステップ」の山との格闘だった。

ツアーに行く、行かないは眼中に無く、今、目の前にある、「やること」で必死だった。

マイク（イケメン、ジョン・トラボルタ）はいつも私を馬鹿にしていた。

「りずむに、木の破片を与えると、いつまでもタップするぜ」と毎日からかって、笑っていた。

だけど、マイクは、ものすごく素敵なダンサーだった。

マイクは私の目標になり、マイクとパリスのようなデウオが私の夢となった。

（今、私がサーロと踊っているのは、そのマイク&パリスの形にすごく似ている。

私の心の中の、理想のデウオだ。）

そして、この「カンパニーで一番踊れない私」を、ヘザーが呼び出す日がやってきた。

リハーサルが終わる5時近くに、ヘザーが私を外へ呼び出して言った。

I think I'm gonna take you to
the tour.

（君をツアーにつれてこうと思うんだけど）

YOU WHAT?

（え？何？）

I enjoy watching you dance. Do
you wanna go?

（君が踊ってるのを、見てるのが、楽しいんだよね。ツアー行きた

い？)

YES!!!!!!

私は怖いモノ知らずだった。経験も少ないし、失うものは無い。

ヘザーがくれたチャンスが、本当に「宝物」になることも、私はまだ知らなかった。

こうして、私はツアー行きの切符を一番乗りで手に入れた。

そして、この後はツアーが私を成長させることになる。

追記

「ツアーメンバーの座、争奪戦」はそれなりに激しい争いだった。みんな、すごく面白いダンサーだったし、私たちは仲が良かった。

リズ。リズは天才だった。20歳だったか？タップの技術も音楽的な才能も充分すぎるほど持っていた。

私には意味がわからなかったが、彼女は譜面も読めないし、楽器もなかったことがないけど、聴いた音楽をそのままピアノで弾けた。

両手で。コードもメロディーも弾けた。お父さんが指揮者って言うてたような気がする。

絶対音感も持っていた。沢山のオーディションを受けて、いところまでいくのだが、最終的に「選ばれない」ことが続いて、暗い表情をひきずっていた。そして、このマンハッタン・タップでも暗い表情のまま、同じ結果になったのだった。

その後、彼女は、念願だった「STOMP」のオーディションに受かり、タップダンサーとしても、パフォーマーとしても大きく成長した。

シンシア。ブラジル人。私は彼女と一番仲良しだった。そして、デイレクターが私の次にツアーメンバーに選んだのがシンシアだった。私たちは、手を取り合って喜んだが、そこに、ペーパー（ビザ）の問題が影を落とした。

シンシアは、26歳で結婚していて、旦那さんが銀行に勤めていて、NYで働いていた。

そのため、「妻」としてNYに滞在することはできても、まだ「働く」ためのペーパーが無い。

ヘザーはペーパーを非常に恐れていた。なぜならば、デイレクター（ヘザー）自身も、カナダ人だったから。

違法なことをすれば、ヘザーの今後に直接影響してくる。

ヘザーは、ペーパーが間に合わないシンシアをあきらめた。

私たちの仲はしばらく微妙になったけど、その後、OFFブロードウェイと一緒に踊ったり、日本に一緒に行ったりして、その友情はつづいた。

シャローン。アフロ・アメリカン。超お調子もの。才能も技術も、幼少のころからダンスをやっていて、申し分ないが、とにかく

一生懸命やらない。笑。のらり、くらり、のらり、くらり、のらり、くらり。

いつもリハをさばることを考えていた。

だが、その彼女の性格がヘザーの笑を誘い、結局ヘザーは、シンシアのかわりにシャローンを選んだ。

マリア。アメリカ人、白人。この人は完全に「イライザ」でした。笑。

デイレクターや他の人に取り入るのがうまくて、表裏が激

しく、私はその「裏」の部分でいじめられた。

ツアーメンバーに選ばれ、最初のうちは、私をいじめまくってたけど、2週間のうちに、他のメンバーから総すかんをくら

誰も彼女と話をしなくなった。素敵なダンサーなのに。表現とかダンスにエネルギーを使うんじゃないって、根回しとか、

おべっかとかにチカラを入れていた。何がしたいのか、わからなかったけど、みんなに無視されて、なんかかわいそうな気がして

マリアと話をした。結構、田舎から出てきて（ミッド・ウエスト出身だったような）、なんか虚勢をはって、のし上がらないとー！とか

思っちゃってたみたい。まだ、若かったから。マリアもそのとき20歳くらい。

今はたぶん、いい感じのダンサーになってることだろう。

アaron。黒人男性。22歳。問題外。なぜか「俺様すごいぜ！」って自身満々なのだけど、技術もセンスも、才能もイマイチ？↑ありがち？笑。

タップは「俺様すごいぜ！」って思ってるから、全然練習しないで、シャローンか私を、「お持ち帰る」策略にチカラをいれていた。

問題外だったので、そのうちいなくなった。

マイクの妹 トリーシャ。そう、マイク・ミネリーの妹。タップダンスは上手だったけど、顔がマイクにそっくりで、男性でジョン・トラボルタの顔と

女性でジョン・トラボルタの顔には、かなりの差があった。私はトリーシャと、その後、デウオで踊ったりした。

マイク&パリスがシヨウを休むとき代講で！

サム。日本人。男性。私の当時の彼氏。サムは、すごいスピードでカンパニーをやめた。三日だけ、1週間だから、「なんか違う」と感じたらしい。

私たちの関係的にはそのほうが円満だったので、よかったと思う。笑。

マライカ。アムステルダム人？彼女だけは、違っていた。40代と年齢もずっと上で、どちらかというとヘザーのサポートをしていた。マライカはみんなに親切に教えてくれた。彼女はツアーには興味がなく、ヘザーのもとで勉強したいだけだった。

マライカが、いつも言っていたことが気になってた。

「アムステルダムでは、マリファナが違法じゃないから、みんな自由にマリファナをやる」とか言ってたような。

そんなことがあるのか？「所変われば、、、」だね。

最近、相撲界での、マリファナ事件がとりざたされているから、なんとなく書いてみた。

そういえば、NYでは草のデリバリーボットがあったなあ。

パーティーのとき、電話すると、10分くらいであやしげな紙に包んで持ってくる

メキシカンの人がいた。

私は、絶対、薬もマリファナも草もやらない主義ですけど、、、。

タバコもとくにやめたし、最近、酒もやめつつある。健康が一番ですから、、、。笑。

ああ、あと10人くらいいたはずなのに、思い出せないのが残念。
誰か 思いついたら教えて！

エピソード12 最初のツアー

最初のツアーはアメリカ、ミッド・ウエスト地方。地図でいうと、アメリカ大陸の真ん中ら変。

カンザス、アーカンザス、コロラド、ネブラスカ、ケンタッキーなど10箇所くらい、だったかな？

3月中、2週間のツアーだ。

ミッド・ウエストの気候について、マイクにきいたら、「NYと同じくらいじゃね？」と大嘘をついた。笑。

3月のミッド・ウエストは、砂漠の嵐。気温は氷点下で、風がものすごく強く、顔や手が痛くて前にススメナイ、という気候。

バスで移動して、ホテルにチェックインして、劇場でリハして、本番やって、

また移動。これをひたすら繰り返す。

ミッド・ウエストは本当のアメリカだ。（NYは移民の町）

広大な土地。そして白人王国。カウボーイ？↑偏見かも？

一つの町から、次の町まで、バスでノンストップ（信号も無し）10時間くらい、猛スピードで走る中、

見るものは、4時間に一回くらい、ファーストフード・ジョイントがあるだけ。

走っても走っても広大な土地と、マクドナルド、バーガーキング、タコ・ベル、KFC、マクドナルド。

ああ、他のものを食べさせてくれ。泣。

NYになれていた私には、カルチャーショックだった。

そして、シヨウをやる町にたどり着くと、人々は太っていた。

全体的に相撲部屋級に太っていた。(もちろん、全員じゃないけど、本当に沢山いた)

そして、私たち、白人3人、黒人二人、アジア人一人という組み合わせは、どこへ行ってもじろじろ見られた。

アジア人自体が珍しいのもあるが、超珍しいのは、この「取り合わせ」だ。

一度は、レストランで、おばあさんが大きな声で

「ねえ、どうして、あそこに黒人がいるのかしら？同じ空気を吸いたくないわ。」的な発言をして

私たちを「どきっ」とさせたが、パリスもシャロンも意外に大人で

「おばあちゃん、田舎モノで時代の変化についてこれないんだね？」と軽くあしらって、その場を離れた。

これからのツアーに期待がいつぱいの私にマイクが言った。

You are the 6th person.

おまえは 六番目のメンバーだ。

このカンパニーで六番目とは、「穴埋め」を意味して、群舞のときだけ出てくる。

しかもお客さんから見ても、存在が超薄くて、シヨウが終わってお客さんとの歓談の時間があるけど

たいていのお客さんはお前が出ていたことすら、気付かない。

I was there, once.

俺も そのポジションにいたんだよ。

最初は意地悪で言っているのかと思った。
けど違った。

マイクは、俺も6番目の人間だった。
お客さんに気づかれない存在だった。
悔しかった。

りずむもたぶん今回はそうなると思うけど、くじけるな、と励ま
していた。

そして、実際マイクの言ったとおりになった。

私は目一杯がんばっているけど、他のダンサーのキャリアと技術と
個性がすごすぎて、
たった一人しかないアジア人なのに、その存在はほぼ気づかれず
に終わった。

この2週間の間に、マイクとパリスと私の間には友情と、尊敬が生
まれた。

マイクは私のことを馬鹿にするのをやめて、いろいろなことを教え
てくれる。

そして最後の夜、事件は起きた。

私は疲れはてて、ベッドで眠っていた。

熟睡していたと思うが、人影に驚いて飛び起きた。

大男の人影。暗いから影が巨人みたいに見える。

私は「ぎゃああああああああ」と大声を出して、
枕とかスタンドとかを、その巨人に投げつけた。

巨人も、何か叫んでる。

怖い。

巨人も、何か叫んでる。

Rhythm! It's MIKE!!!! MIKEY!!!!
りずむ! マイクだよ。マイキー!!!!

マイク?っ。

What the hell!

何それ? 超びびったわ。

パリスが「やんちゃ」をはじめて、シャローンと部屋に入って、鍵をかけたから、部屋に入れなくなった。

「部屋に入れる」と言ったら、シャローンがドアの下から、この部屋の鍵をよこした。という。

シャローンめ。さすが、19歳と20歳。気分は完全に修学旅行だね。

ディレクターもいないし、やりたい放題。

パリスはたしか、前のツアーでは、マリアとやってたよね?

モチロンNYに戻ったら、即効で別れてたけど。

そんなパリスとシャローンのおかげで、私はマイクと一晩中おしゃべりをする事になった。

タップのこと、これからのこと、マイク&パリスがこれからつくろうとしてるシヨウのこと。

そして、そして、「りずむも一緒にやるか?」。

ラッキー!!!!

1回目のツアーは、完全に6番目のメンバーで終わったけど、まだここじゃ終われない。

追記 ミッド・ウエストでは、完全に「アメリカ商品」しか手には
いらなかった。

マクドナルドとかバーガーキングもそうだけど、ビールもバドワイ
ザーとか、たばこもマルボロとか

ほんとに、アメリカの真ん中に位置して、外界とは離れて、「アメ
リカナンバーワン」で時代からもかなり遅れている感じをうけた。

エピソード13 初ソロ！ナショナルタップデー！

そのころ、NYの「ナショナルタップデー委員会」では、翌年の「ナショナルタップデー」出演者を議論していた。

「ナショナルタップデー」とは。

4月25日。伝説のタップダンサー、ビル・ボージャングル・ロビンソン生誕の日。

その日を記念して、毎年、アメリカ中で、タップダンスを祝おう！的な祭典が催される。

NYでは毎年「タウンホール」という劇場で、沢山のマスターや世界中からのダンサーを招いて、一日限りの「夢の舞台」が開かれた。

（＋全然関係ないけど、MACYS（有名デパート）の周りを、タップシューズを履いた人々が練り歩く

ばかばかしいお祭りもある。↑このパレードには、ものすごく沢山の人が参加したりして（たぶんほとんど観光客？）

毎年ニュースになったりしているけど、実際タップダンスや、タップダンサーにはほとんど関係ない。笑）

翌年の、司会はダイアン・ウォーカー。

そして、出演は バスター・ブラウンなどNY近隣のマスターたち。

そして、若きマスター、セビアン・グローバー。

そして、そして、日本でも有名な、グレゴリー・ハインズ。

そんな中、毎年、「若いものにもチャンスをあげよう」という枠が

私は、かなり、興奮して、怒り気味に、「出るか?」ってどういう意味?

出るに決まっている。

サムはやめればっ!!! ↑興奮してるから、なぜか喧嘩ごし。

ああ!!っ

その日から、眠れない夜がかなり続いた。

私は「興奮体質」だ。

遠足も、運動会も、学芸会も、パーティーもデートも。

ほぼ、前の日は絶対、もつと悪いときは、1週間とか1ヶ月前から興奮して、

眠れなくなったり、夜中に目が覚めたり。

そんな、私は、「いざ」ってときに、絶対に「不調」だ。
寝てないから。

遠足も、デートも、本番も、肝心なときに眠くてふらふら。

舞台上に立って、かれこれ19年?くらいだけど、

今も相変わらず、本番はふらふら。笑。 ↑もう、このスタイルの自分に慣れたけど。

あの電話の日から、4月25日のナショナルタップデーまで、どうやっても、何をしていても、心臓の爆音が止まらなかった。

ドッキン、ドッキン、ドッキン。
ドッキン、ドッキン、ドッキン。

うわっ！！！！ ↑びっくりして、夜中に飛び起きる。

三人でリハしたり、一人で練習したり、三人でリハしたり、一人で練習したり。

サムとりずむとKAZU。

三人のリハは難航した。

三人三様だし、しかも、三人とも若くて譲ることを知らない。

っていうか、人生で初のソロ！人生初の大舞台！

譲ってたまるかつ！、、に決まっている。

曲を選ぶにも、振り付けをつくるにも、三人とも、ばらばらの意見を、バラバラに出して、

それぞれが「自分の意見が一番」と思っていたに違いない。

そして、リハはまとまらないまま、「じゃあ、またね」が続いた。

そうこうするうちに、プログラムができてきた。

グレゴリーや、セビアンの名前の下に

THREE TAPPERS FROM JAPAN！！！！

（三人の日本からきたタップダンサーたち）笑。

そして 三人の名前。

S A M、R H Y T H M、K A Z U

きたああああああああああつ！

そして、我が師匠も、きたああああああああああつ！

「その時期N Yに行こうと思うから、舞台見に行くよ！」（↑我が師匠、玉野和紀先生）

ドッキン、ドッキン、ドッキン。
ドッキン、ドッキン、ドッキン。

私の踊る曲が決まり（↑私がなぜこの曲を選んだのかいまだに不明。その時期、自分的に「旬」だったのだろう。タイトルも不明。）

サム曲が決まり（↑サムはワルツ）
K A Z Uの曲が決まり（↑K A Z Uはボッサ。B L U E B O S S A）

三人で踊る曲が決まった。

三人の曲は、K A Z Uの提案で、S U K I Y A K I S O N G（すき焼きソング）としても、世界的に有名な

「上を向いて歩こう」のジャズアレンジ。

モチロン、生ピアノ演奏で。

三人ともやっと納得して、一緒に踊ることも楽しみはじめていた。

あと3日、

あと2日、

あと1日、ゝゝ。

もう、今日。

全然、寝れなかった。

朝から練習しても、練習しても、時計が全然進まない。

何度も、家とスタジオ（FAZIL・S）を往復して、練習して、家帰って、練習して、家帰って、まだ、昼！っ。

もう一回練習して、家帰って、、、。

夜になるまでが、1年くらいに感じられた。

そして、「ナショナルタップデー」の幕が上がり、一幕の中盤あたりで、、、。

ダイアンがKAZUの名前を呼んだ！

KAZUが踊っている。

堂々としている。

いつもより走りぎみだけど、堂々としている。

そして笑顔。

よしっ！

袖でKAZUが踊るのを、祈るように見守った。

大歓声の中、KAZUがこっちに向かって、走ってくる。

私の番。

すれ違いざまに、がっちり握手をかわして、ピアニストのもとにかけよった。

大きく息を吸って、テンポを出す。

私も、いつもより、全然早いテンポだしてる。

緊張で足が動かない。

チカラ一杯、チカラばかりいれて踏んで、音は全然でなかった。
ますます、チカラが入る。

ストップタイムで、タップの音だけになると、

NYの暖かいお客さんは、すぐに、笑顔と歓声で、私のタップを応援した。

緊張がほぐれる。

タップは楽しい。

舞台も楽しい。

お客さんとの会話も楽しい。

私はいつも、いつも、なぜ舞台に立つまで、舞台を恐れるのだろう。

それは今も全く変わらない。

でも、舞台に立ってみると、そこは、いつも、楽しくて、暖かい場所だ。

私にとっては。

最後まで、チカラばかり入って、音の出ない演奏だったが、

チカラを出し切った私を観客は、大歓声で送ってくれた。

そしてサム番、、、、、ごめん、この辺りは、正直、モウロウとして覚えていない。

そして、完全に緊張がほぐれた三人で踊る「上を向いて歩こう」は最高に楽しかった。

会場と三人が一体になったのを感じたし、踊ったあとの、割れんばかりの拍手と歓声は、どこにもウソがなかったと思う。

幸せの瞬間。

ああ、幸せの瞬間だ。

アメリカまで、きたな。

やりたいことみつけたな。

幸せだな。

はあ。

っ
ていう思いを、
何度も、
何度も噛み締めた。

玉野先生に見ただけのこと、超幸せだった。

アメリカまできて、やりたいことを、見つけた私は幸せだった。

「ただ、その思いが「片思い」じゃなく、「両思い」になった瞬間だ。」

私の想いをお客さんが受け入れてくれた。
一瞬だけかもしれないけど、「両思い」の瞬間は幸せだった。

エピソード14 セックス アンド ザ シティー チャーリー編

さて、タップの話がだれてきたので、重要な「セックス アンド ザ シティー」の話に飛んでみたいと思う。

サムと一緒にいた4年近くは、かなり落ち着いていた。一緒に住んでいたし、目標もあった。

サムとの別れは少しずつ、少しずつやってきた。

「ありがち」だけど、20代で、二人とも同じタップダンスをやっている、

お互い、この国では、「外国人」で。

お金のこと、将来のこと、ダンスのこと、仕事のこと、不安、不満、疑問が、なんとなくぶつかり合うようになった。

サムはとても寛大で、沢山の愛情を注いでくれたけど、そんなサムでさえ、だんだん、私と一緒にいることが、辛くなってくるのが、

手にとるようにわかった。

自分自身に対する苛立ちを、お互いにぶつけてしまう日々。

「一度、距離をおいて、別居しよう」の時点で、終りの日が近いことがわかっていた。

一度に衝撃がこないように、お互い、少しずつ、少しずつ、痛みを感じながら、別れていった。

サムと私の4年半くらいにわたる付き合いが終わると、また、

とめどない「セックス アンド ザ シティー」の毎日が待っていた。

4年間という長い年月、一緒にいた人の「穴」を埋めるのは、たやすいことじゃない。

っていうか、「4年間ぶんの時間」が必要だ。

いつも、私の近くにいてくれたの、チャーリー。（チャイニーズ・アメリカン）。

大学院で建築を勉強していて、とても、物静かで、頭がよく、私にはひたすらやさしかった。

同じ、アジア人同士ということで、価値観や考え方を共有できるところが多く

私の悩みをいつもきいてくれた。

チャーリーとは、友人↓「セフレ」。「体関係のある大切な友達。」になった。

だけど、そんなに、共有する時間や価値観が多い人と、それで終わるはずはない。

ある日、チャーリーがずっと黙ったまた、何も言わないので、心配した私に、彼は言った。

D o y o u m i n d i f I s a i d I l o v e y o u ?

「愛してる」って言ったら困る？

ね？これがチャーリー。

思いやりがあって、空気がよめるから、私はチャーリーが好き。

「愛してるよ」と言ってしまう前に
「この言葉を言ったら、りずむがすごく困るのではないか？」って
考えてくれる。

でも、やさしすぎた。チャーリーは私には優しすぎた。
そして、とても好きだったけど、彼の気持ちにこたえられることは
無いだろう、と
思ったから、「もう会わない」ってことにした。

これが、私のチャーリーへの思いやり、、、みたいな？
私も、片思いを沢山しているから、愛しても、愛されないことがあ
るのを知っているから、
期待させたくなかった。

期待させて、裏切りたくなかった。

チャーリーとは、日本に帰ってきてからも、メールをすることがあっ
た。

もう、時間がだいぶんたっているし、お互いどうしているのか、気に
なっていたから。

だけど、去年の秋、私が結婚を報告したメールを最後に、チャーリ
ーは1個もメールを返さなくなった。

とてもつもなく、寂しい思いだったが、チャーリーにとっては、ま
だ受け入れられない事だったのだと思うから、仕方が無い。

とても、大切な友人だし、なにより、かけがえの無い「一定の時間」
を共有した友達なのに。

会いたいな。チャーリーに会いたいな。

でも、チャーリーはもうメールに応答しない。

エピソード15 セックス アンド ザ シティー ジョニー編

そして、その次に現れたのは、意味不明のフランス人パティシエ、ジョニー。笑。↑フランス人のくせにアメリカ名。

彼は、私がOFF & OFF ブロードウェイのショウに出演していたとき、たまたま、見に来たお客さん。

一番前の列で見っていた。目を輝かせてみていた。イケメンだったので、私も見ていた。

目が沢山あった。

ショウが終わると、楽屋口で彼がまっていた。

ひとしきりショウの素晴らしさを、熱狂的にコメントしたあと、「おなかへってない？僕、日本食好きだよ。何か食べようよ！」と熱心に誘った。

私は、う~~~~~~~~ん。と悩んで、また今度ね。つてことにした。

彼は次の日も来た。

今度こそ、食事に行った。

そこで、彼がNYで三ツ星レストラン（名前忘れた）のパティシエであることがわかった。

つていうか、どこの店に行っても、バーに行っても、「俺は●●ってレストランの、パティシエなんだけど、、」って言って名刺をだして、

どこの店でも、いい席に通された。

ええええええええええ。↑私、かなり、ドン引き。
なんか、この人、権力を誇示していや！

有名レストランのパーティシエなのは、別にいいけど、それをいちいち言うのがイヤ。

その後も、トンネルとか、なんちゃらとか、当時有名だったクラブにひたすら引きずりまわされて、

1、俺はこんなに顔が利くぜ！（どの店も顔パス）

2、俺はこんなにもてるぜ！（どのクラブに行っても、沢山の女が声をかける）

3、しかも俺は、男にもてるぜ！（っていうか この人 バイ。バイを自慢されても、、、、）

バイとは、バイセクシャル。男も女もどっちもOKの人。

を、見せ付けようと必死でがんばっていた。

ジョニーが、やればやるほど、「あゝこの人無理」って思った。

ところが、ジョニーの家は、私の家から歩いて1分の所にあることが判明。

「もう、無理」と思う↓食事のお礼を丁寧に申し上げて別れようとする↓家まで送るよという申し出を断る。

↓だけど、帰り道がどこまでも一緒、、、、。↓「え？家、ここ？おれんち、そこ」みたいな。

次の日から、彼は毎日、手作りのチョコレートを私に届けた。

「私、チョコレートあまり食べれないの。」↑そんなに好きじゃない。

って、言っているのに、毎日、毎日、持ってきた。

でもジョニーにとっては、「自分の仕事を見せたいだけ」だから私がチョコが好きかどうかは、関係無かったみたいだ。

そんな相手に落ちるわけないでしょ？

って思うでしょ？

違うんです。

そこは セックス アンド ザ シティー。

みんな、寂しいとき、辛い瞬間、そばにいて、そして自分に好意を寄せてくれる人に

結局落ちるんだよね。多かれ、少なかれ？

ジョニーの場合は、私が、オイスター「牡蠣」にあたって、食中毒になり、真

夜中に吐きまくって、嘔吐と熱と脱水症状で動けなくなっ

助けを呼ぶ人がいなくて、歩いて1分の距離のジョニーを呼んでしまった。

彼が、救急病棟につれていってくれたし、そのあと2〜3日ジョニーの部屋で世話になってしまっ

そのまま、「恩があるから、」って感じで（↑結局、押しに弱い）、セフレになった。

話が合うわけでもなく、彼の高慢ちき（笑）で、プライドばかり高い態度は

相変わらずだったが、それでも、彼は私にやさしかった。

どのくらい、付き合ったんだろうか、3ヶ月か4ヶ月か半年か、ゝ？
あまり覚えていないけど、たぶん、ジョニーが次の「俺のここがす
ごいぜ！」って見せ付けたい相手が
見つかったあたりで自然消滅した。

エピソード16 セックス アンド ザ シティー エリー編

その次に覚えているのは、エリー。ウクライナ人のジャズドラマー。前に出演していたOFF&OFFのショウでドラムをたたいていた。

ウクライナ人だけど、私の中では、ロシア人と区別がつかなくて、「なんとなくロシア人」って思っていた。

ドラムはかつこよかった。

ショウの合間には、いつも軽口をたたいて、冗談を言い合い、話も面白かった。

ロシア人のわりに、全然なまりのない英語をしゃべっていた。

イケメンだけど、超意地悪でずる賢そうな顔をしていた。（↑キツネ顔？）

お互いに興味を持っていることはわかっていたので、最初に一緒に食事をした後は、すぐ彼の家に行った。

ああ！

なんで、セックスの合性って、会話とか音楽の合性と正比例しないのだろう？

まず、無理だったのは、エリーにルームメイトがいたこと。これはNYでは珍しいことではない。

多い人は、4人とか5人でシェアしている人もいる。

エリーのルームメイトは一人だったけど、そのとき家にいた。

エリーは、「燃えるからルームメイトの前でやろっぜ！」みたいな

ことを言ってきた。

それは別に悪くないかも？とも思ったけど、そんなことを考えているエリーのセックスは

チカラまかせで、権力誇示的な、意地悪で、悲壮感を与えるものだった。

ああ。

エリーとも、友達でいいか。

っていうか、お互いに、1回やった時点で、お互いに対する興味、もう無いね。

そんなことの繰り返し　セックス　アンド　ザ　シティー。なんだけど。

あのドラマ、なんであんなにはやっているのか、わかんないな。

笑。

エピソード17 セックス アンド ザ シティー アントニオ編

アントニオ。メキシコ人。ジャズ・ラテンドラマー。

アントニオは私のコンガの先生（パナマ人）の親友だった。

彼は、メキシコ人には珍しく、背が高く、黒髪で、アメリカで言う「イケメン」の王道。

そして、ラテンジャズの世界では、そのドラムの腕で、多くのプレイヤーから一目おかれる
トッププレイヤーの一人だった。

そして、さらに、メキシコ人には珍しく、ちゃんとしていた。

ちゃんとする、とは

時間を守ったり、

約束を守ったり、

予定をたてたり、

仕事をさぼらない。

プラス

それでいて、ラティーノ特有の、「女性を超お姫様扱い」するワザも持っていた。

そんな、完璧な人っているの？って、思うかもしれないけど、いた。

さらに彼は、思慮深かった。

色んなことを、沢山話したけど、彼は、とても、深かった。

彼に言われて、「はっ」とした言葉を、2つ覚えている。

パークッション（コンガ）を習っていた私に、アントニオが言った。

If you do one thing so well, your ego tends to grow so big, 1つの事をすごく上手にできるようになると、自分のエゴがどんどん大きくなってね、

I am afraid to start a new thing like learning to play the congas.

だから、今からコンガを学ぶとか、新しいことをするのが 怖くないっちゃんだよな。

Because I know I would be so irritated.

だって、たぶん、すごくイライラしちゃうと思うんだ。うまくいかないことに。

そう言つて、彼は、「新しいことを学んでいる」私をほめたが、私は、そういう、人間の「小さい」ところ、や自分の中のエゴを素直に認められる彼が とても好きだった。

そして、もう1つアントニオが言っていた言葉。

You know why we are attracted to each other so much? なんて僕たちがお互いに、超惹かれるのかわかる？

If you know a person could do

what you like so well,

自分が好きなことを、超かつこよくできる人がいると、

You can't help attracted to that person.

その人に惹かれざるをえない、よね？

私はその言葉に、超「はっ」とした。

そういえば、私、いつも、ドラマーとかパーカッショニストに惹かれてるかも？

なんか、自分のパターンが見えた気がした。笑。↑遅い。

そして、アントニオと私は、とても深いところで惹かれあっただけ、やっぱり、うまくいかなかった。

本当につきなみで、ごめんなさい、って感じだけど、お互いツアーでNYにいないことが多かったし

お互い寂しがりだったし、「すれ違い」が重なって自然消滅した。

今でも、また性懲りもなく、私がドラマーやパーカッショニストに惹かれたとき、アントニオの言葉を思い出す。笑。

あと、彼が言っていた、ego tends to grows
o big (エゴが超巨大化)にならないように、
今でも、新しいことを恐れずにやっていきたいと思う。

エピソード18 愛したら、愛されたい！

そう、私は「両思い」が好き。

「片思い」は辛くて、切なくて、苦しくて、妄想ばかりで、本当の相手を知らない。

最初は、リズムタップと、その世界に片思いしていた私だけど、少しずつ、そして確実に、その想いは受け入れられた。

ジャムセッションで学び、ライブに出演して、舞台に出演して、ツアーでアメリカを回り、成長し、そして、アメリカの観客から愛されるようになっていた。

あの、最初のツアーからは2年くらいがたっただろうか？
マイクが言っていた「6 番目」の穴埋めダンサーだった私もヨーロッパツアーに行くころには、1曲の振り付けを任せられソロやデュオも踊るようになっていた。

メンバーも大きくかわり、新しく、「ノイズ・フランク」に出演していた、マーシャル・デービスと一緒に踊ることができたり、「タップボックス」に出演していたダンサーも入ってきた。

タップボックスとは、オーストラリアで生まれたタップのショウで、世界中をツアーするほどの大ヒットとなったショウだ。

ショウが大ヒットを飛ばしたときに、発生する問題がある。

カンパニーが「メガカンパニー」に成長して、世界中をツアーしてまわると、そのために何十ものツアーグループをつくらなくてはならない。

そのために、どんどん、どんどん、新しいダンサーや、ツアーメン
バーを雇う。

そのため、必然的にダンサーやショウの質は下がっていく、、と
いう傾向にある。

ブロードウェイのショウもそうだ。最初の1年、2年は「オリジナ
ルキャスト」で上演されるが、そのあと、メガカンパニーになって
オリジナルキャストが、ばらばらに配置されるので、「ブロードウ
エイ」は手薄になり、実際は日本で見たほうが「当り」だったり、
その「ツアーグループ」により、ものすごく「当り、はずれ」が出
てくるのだ。

タップドックスからきた19歳はその中で「はずれ」だった。（私
の個人的な意見だけど）

だけど、ヘザーは「彼には足りないものが沢山あるけど、いいパフ
オーマーだから」と言って、

私に彼のお守りをいつけた。

ええ？

と思ったけど、そういえば、私も入ったばかりのときは、みんなに
沢山教えてもらった。

ジュングリだね。

教えてもらったならば、教える番がくる。

まず

●「チカラいっぱい、床をたたかない」ことを教える。↑これ超大
変。

●「スウィング」を教える。↑基本、ジャズバンドでやるシヨウだから、スウィングできないと、ゝゝ。これも超大変。

●そして何より、「俺は、世界一すげえんだぜ！」というおごりをやめてもらう。↑これは無理だった。

っていうか、「俺、世界一すげえ！」と思っている人に何を教えるのも難しい。

そして、さらにヘザーは、「彼にとって苦手分野だから勉強になる」と言っ

Do the Sunny side with him .
サニーサイドを 彼とやりなよ！

と言った。

ガああああああああああん。

サニーサイドとは、私がNYで始めて振り付けした思い出の曲。

今、現在でもライブで踊っているナンバーだ。

マーシャルと踊りたいです。

マーシャルにしてください。

マーシャル大好き！

という、申し出はあっさり却下された。

というわけで、ヨーロッパでは、

「俺、世界一すげえええええええええ」という力でねじ伏せて、スウィング感ゼロのサニーサイドを踊ってきた。

そんな頃になると、どうなってくるか?というところ、

カンパニーを離れたくなる。

サラリーマンで言うところの、「会社をやめて、起業する」みたいな?

2年前は、何もかもが新しく、何もかもが刺激的だった、マンハッタンタップ。

そして、ヘザーの振り付け。

最初は1曲、そして、2曲、そして、3曲と、自分の振り付けがつくりたくなる。

そして、5曲、6曲、7曲、を数えてみたら、「自分のショウ」がつくりたくなる。

ヘザーは素晴らしいディレクターだ。

みんなそこから学んで、良いダンサーに成長して、そして、今度は「自分の世界」をつくりたくなって、カンパニーを離れていく。

これは、仕方の無い「自然の法則」だと思う。

私もまた、自然と、カンパニーから離れ、自分のやりたいことを、次々に「形」にすることをはじめていた。

けれども、そこで!

NYでは「外国人」である私が、「会社」を離れたとき、問題が起こる。

ペーパー（ビザ）の問題だ。

外国人である限り、なんらかの、ペーパーを持って、長期滞在して
いなければならぬ。

学生ビザならば、学校に行っていなければならぬし、
就労ビザならば、その会社に勤めて、アメリカに税金を納めてい
なければ、ならない。

特に、ダンサー、アーティストなどは、「特定の会社に勤めてい
れば満足」、というわけにはいかないから、ペーパー問題で、苦悩の
日々が続く。

一度、オーディションを受けにいったら、外国人と見るや否や、ペ
ーパーを見せろ！と言われて、私は、ペーパーが無くて、オーデ
イションを受けたかったのだけれど、

「ビザも無いのに、何しに来た！ここは、ダンサーが仕事を得る場
所だ。

人の時間を無駄にするな！！！」

と怒鳴られて、家に帰り、悔しくて、悔しくて、泣きまくったこと
もある。

近年は、「アーティストビザ」という、熱いビザがあるらしいが、
それだって、みんな、

「どうやって手にはいるのか??？」情報をかきまわっている、
というのが現状だ。

リズムタップに出会ったときから、今まで、夢中でタップの練習を
してきた。

だけど、今からは、「表現」に時間を費やしたかった。

やりたいことが沢山あった。

アメリカを回った、ヨーロッパも行った。

たぶん、世界中、まだまた、行ったことがない国が山ほどあるに違いないけれど、

私は、日本に帰って、今度は「日本人に、私を、受け入れてもらえるのか？」

やってみたくなった。

自由の国アメリカって言うけれど、日本人のって一番自由の国は日本だと思う。

日本は豊かだ。

日本は発展している。

日本は私の国だ。

日本で活動しようとする私に、父が言った。

「え？まだじゃねえか？あと5年だな。もうひと踏ん張りだ。

何より、日本人は、アメリカで認められたものしか、認めないから。今帰ってきたら、中途半端だ。あと5年踏ん張って、アメリカで認められたら、日本人は認めるから」

父の言うことは正しいのかもしれない。

正しくないのかもしれない。

私は、アメリカ人が認める、認めないに関係なく、好きなものがある。

私は、日本人にも、そういう感性が育ちつつある、と信じている。私は、アメリカじゃなく、日本で、伝えたいことがいっぱいある。

だから、日本でやってみたい。

と思う。

その考えに、正しいも正しくないも無いと思う。

こうして、私は、日本とアメリカを頻繁に行ったりきたりするようになった。

エピソード19 浦島太郎族

私がNYに移住してから、日本に帰国するまで、約6年間。俗に、この様に、長い時間を海外で過して帰ってきた人間は「浦島太郎族」と呼ばれる。

そう。竜宮城で2、3日、浮かれて遊んでいた、と思って、帰郷したら、思いもよならぬ長い年月が経過して昔の友人も知人も、職場も、全てが「サマガワリ」していて、びっくり！という現象だ。

私は今、36歳だけど、よく「ええ？36歳。全然見えない」と言われる。

それは、この「浦島族」に1つの要因がある。（モチロン、元来、童顔なせいもあり、あとエステなどにチカラを入れているせいもあるが）

私は、6年間「竜宮城」で過したので、その時間は、日本での時計が止まっていたことになる。

したがって私は今、30歳なのだ。

わかるような、わからないような、理論だけど、ものすごく、理屈がとおっているように思うのは、私だけだろうか？

他にも、知り合いのダンサーで、ちょこちょこ海外逃亡したり、海外で長期休暇（1ヶ月とか 3ヶ月とか）をとっている人間が、同じ年齢の人に比べて、「若く」見えたり、実際「若かったり」するのは、ちょいちょい、この「浦島システム」を利用して、日本での時計を止めているために違う。

「浦島りずむ」を待ち受けていたのは、「携帯王国日本」。

まだ、アメリカでは、トランシーバーのように巨大な携帯電話を、極少数のビジネスマンが持っていたり、持ってなかったり、という時代に、日本に帰ってみると、「1人1台当たり前」で、「携帯を持っていない人」〃「変わり者」の構図ができあがっていた。

すごい！日本！

最先端で、リッチ王国だね。

アメリカより、先進国だね。

と思った。

最初の数週間は、「携帯電話なんて、」と抵抗を試みたが、あっという間に、時代に飲み込まれて、携帯を持ち歩くようになった。

日本での最初の数ヶ月は、アメリカで何度か会った、日本人タップダンサー、舞ちゃんのヘルプで、ワークショップ（特別クラス）を沢山やった。

「沢山やった」、というか、実際「毎日やった」。

平日は新宿のスタジオHOOFIN'（ケンタさんのスタジオ）を昼間おかりして。

週末は高田馬場でスタジオをかりて。

平日の昼間は、毎日、「誰も来ないかも？」と恐る恐るスタジオに行ったが、毎日「1人だけ」生徒さんがきてくれた。

この「毎日1人」っていうのが、なかなか、すごいと思う。

毎日、たった1人だけくる。

毎日、違う人がくる。

毎日、「誰も来ない確立99パーセント」の中、1人だけ。

毎日、「今日だけ、これたんで、、」と言って、誰かしら来るのだ。

実は、NYでも、「モグリ」で教えをやっていた。↑ビザの関係上、お金を稼いではいけないはずなのだが、、。

毎週、「誰もこないかも？」って、思いながらスタジオに行くと、必ず1人来た。

時には、アメリカ人。

時には、フランス人。

時には、日本人。

時には、スイス人。

口こみで、本当に、毎週、色んな人が、1人だけきた。↑でも、1人。

タップダンサーの友人の多くが、私と同様に、「クラスを開いてみては、誰も来ないからやめる、」という流れを、何度も見てきた。

私の場合は、毎週、たった1人の「誰か」がきてくれるので、クラスが続いた。

そして、継続はチカラ。

そして、2年、3年が経過。

そして、最初は、「緊張」と、「ステップ」だけが、ぱんぱんに詰め込まれていたクラスだったが、毎週、必ず、「誰か1人きてくれる」おかげで、少しずつ、自分のスタイルや教え方を学んだ。

日本でも、同様に、平日には、「毎日、1人」のクラス。

そして、週末には、舞ちゃんのヘルプで、20人〜25人ほどの人が集まってくれた。アメリカの話をしたり、タップの話をしたり、タップを教えたりして、とても楽しかった。

そして、そして、ちょっと下世話にきこえるかもしれないけど、

It feels nice to be able to financially make some money!!!!
お金稼げるってうれしいね！ やつとだ！

みたいな。

クラスの後、たくさんのお札を受け取る。

沢山なのは、ほとんどが千円札だから。

家に帰って、千円札をいっぱい数えている私に、父が言った。

「おい！うれしいだろう。うれしいんだよね。最初に自分で稼いだお金！
嬉しいんだよね。」

父は、私に言っているようで、しみじみと、自分が始めてお金を稼いだ日を思い出しているようだった。

「はい。嬉しいです。」

得に、NYでの後半の2年くらいは、カンパニーをやめて、色々なシヨウに出たり、オーディションを受けたりしたけど、

●ビザが無いから仕事はできない
または

●仕事はできないけど、舞台には立ちたいから 「お金はいらんです」という条件で、出演。↑やや泣き寝入り気味

●クラスもやっていたが、BDCやステップスなどでは、やはりビザが無いので教えられないから、「モグリ」でやるか、友人の代講ばかりしていた。

そんな動きを繰り返してきたから、
あたりまえのようだけど、

「働いた分だけ、ちゃんとお金をいただく」ってことがすごく嬉しかった。

アーティストっていう職業は、日本でも、アメリカでも、「働いた分、お金をいただける」なんてことは、すごく珍しいことだ。

そんな、幸せを味わっていた。
舞ちゃん、ありがとう。

そして、今、これを、書いていて、思った。

私は、今、日本での生活も8年目くらいになり、

初心を完全に忘れかけ、
最近のクラスは、また、「緊張」と「ステップ」を詰め込んでいる。

私、何をやっているのだろうか？

何を忘れて、何を置いてきちゃったのか、
ちよつと考えたい。

ちよつと考えながら、書いている。

エピソード20 OBAMA!

この物語は唐突に終わる。

あの、9・11のテロが唐突にやってきて、私にはガンという病気が唐突にやってきた。実話だけを、噛み締めながら書きつづってきたこの物語は同じように、唐突だけど、最高の終りを見つけた。世界中に希望を与える、あの日を迎えて、。

9・11の事件から8年。

私がガンを克服してから8年。

私がNYを去ってから8年。

あの日から、ずっとNYに何かを置いてきてしまったような気がしていた。

病氣と闘い、その後、社会に復帰するためにもがいている間に、大好きだったマスター達は、この世を去ってしまった。

そうしたら、もう、NYを訪れる意味が無いように思われて、NYがずっと「遠い場所」になってしまった。

だから、NYやアメリカからタップダンサーが日本にやってきても、私は彼らに会うことを恐れた。

何を恐れていたのか？わからないが、「遠い国からやってきた人」に会うことを恐れた。

Alienated

英語で言うところの、「よそ者」感。みたいな。

でも、今年の私は違った。

あれから8年が経過し、やっと本来の「健康」を取り戻し、病気の恐怖からくる「ウツ」とも向き合うことができ、

病気のことも言葉や文章にすることができた。

NYにも行ってきた。

NYでは、私が、雨の日も、風の日も、雪の日も、通い続けた、練習スタジオ

「FAZIL'S」を訪れたかった。

そこに、あのころの自分の残像や、大好きなマスター達や、ダンサー達の残像を見ることができれば、、、、と思っていた。

しかし、そのスタジオすら、もう、無くなっていた。

スタジオがあるはずの8THアベニューを、何度も何度も、行ったり来たり、行ったり来たりして

スタジオが無くなっていたことに気づき、呆然として、涙が溢れた。

そして、今年、日本にやってきたダンサー、ジェイソンとも、きちんと向かい合って話をすることができた。

ジェイソンは、「アメリカ初の黒人大統領誕生」の歴史的な日を日本でもかえた。

私はジェイソンと会って、何よりも、そのことを話したかった。

だって、きっと、日本人の私にも、夢や希望を抱かせてくれるこの出来事、

彼らにとっては、どんなに大きなことか？

想像もつかないくらいだと思う。

私はジェイソンに

I c o u l d n ' t h a v e i m a g i n e d t h a t
l a s t y e a r .

去年でも、黒人の大統領なんて、全く、想像できなかったよ。とい
うと、

ジェイソンは、

M E N I T H E R ! ! ! 僕だつてさ。

N O N E O F U S C O U L D ! 全く誰も想像できなかった
さ！

U P U N T I L L T H I S Y E A R ! ! ! 今年まではね
！

とチカラいっぱい言った。

a n d , i m a g i n e , t h o s e m a s t e r s w h
o w e n t t h r o u g h a l o t ,
b a c k i n t h o s e d a y s , , ,

なくなつた タップマスターたち、黒人が迫害されていた時代を生
きてきた人々、

そんな人たちが、もし、今日という日を知ったら、、、。

ジェイソンは、その日一日、泣いて過したという。

「こんな日に感情的にならずにはいられない」という。

ジェイソンは 言った

I s e e m y s e l f a s l e a d e r , 俺は自分の
ことをリーダーとして見ている

it might be a leader of a small community, とても小さい集団のリーダーかもしれない

but, as a leader, I always pay attention to the bigger group, and a bigger community

だけど、俺はリーダーだから、常に、もっと大きい集団とか、グループのリーダーを見ている。

because, it affects everything, なぜなら、大きいリーダーは僕らに影響を及ぼす。

art imitates life, アート(ダンス)は「生活」を反映するし

art imitates politics アート(ダンス)は「政治」も反映する。

これからは、

「黒人の大統領」が夢でないことを、不可能を可能にすることができることを、世の中は本当に変えられるということを、自信を持って、子供たちに話すことができる。

私は、ずっとさぼっていた、寝る前の感謝のお祈りをまた始めたいと思う。

YES WE CAN!!!

もっとできるはず。

きっとできるはず。

きつとかなうはず。

もつとかなうはず。

夢をもてますように。

希望を持てますように。

愛がありますように。

真実がありますように。

やさしさを取り戻しますように。

あたたかな光が差しますように。

あたたかな光がさしますように。

私にも

あなたにも

私にも

あなたにも

YES WE CAN !!!

30歳〜35歳までの、

苦しく、悲観的で、迷走した日々をピリオドをうつ。

36歳から、また希望を持ってがんばれる自分をはじめる。

YES WE CAN !!!

近藤りずむ 36歳。 2008年11月8日。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6648e/>

がんとNY

2010年10月15日22時51分発行